音楽で心の交流
優しさあふれる歌声にのせて

平成一九年七月三〇日、福岡県北九州市立穴生中学校では、文化交流使のチェコ少年少女合唱団を迎え、交流会が行われました。

合唱団を乗せたバスを、チェコの国旗を振りながら、温かい拍手で生徒・教職員が迎えました。あいさつもそこそこに、共通の言葉である合唱をということで、交流会が始まりました。まずは、穴生中学校合唱部が『春は来ぬ』など数曲を披露し、続いてチェコ少年少女合唱団がチェコの民謡や、日本語で『さくらさくら』『夏の思い出』『ソーラン節』を披露しました。

とても和やかな雰囲気の中で、夏の暑さにも負けず、参加者の互いの歌声に熱心に聞き入っていました。言葉は通じなくても音楽をとおして仲間意識が生まれたようでした。合同合唱のあとの満足そうな子どもたちの表情に、充実した時間を過ごしたことが表れていました。また、お互いの文化等について質問を交わす中で、それぞれが自国の文化を大切にしながら他国の文化や習慣を理解しようとしている様子もうかがえました。チェコ少年少女合唱団の方から、「言葉はわからないが、穴生中の皆さんの歌を聴いて思いが伝わる気がしました」とメッセージをいただきました。また、合唱部長の大山優さんは、「鳥肌が立つくらいきれいな歌声。よい経験になりました」と喜んでいました。

当初、今回の交流会のお話をいただいたときは、どうしようかと迷いました。というのも、翌日が、生徒たちが一年間の目標の一つとしているNHK合唱コンクールの福岡県大会だったからです。しかし、世界を舞台に活躍する合唱団と共に合唱する機会など、生徒たちにとって一生に一度あるかないかの貴重な体験ですから、顧問、生徒にこの交流会の主旨を説明し、本校での開催を決定しました。

交流会で合唱団から何かを得ようとする生徒たちの真剣な眼差しやうれしそうな笑顔を見て、本当に開催してよかったと思いました。この交流が子どもたちの今後の考え方や生き方に生かされ、文化をとおして、地球規模での心の輪が少しずつ広がることに期待したいと思います。

余談ですが、合唱部の生徒たちはよい刺激を受け、みごと、NHK合唱コンクール県大会では銀賞を受賞し、また、その後、九州合唱コンクール大会出場を果たしてくれました。

（北九州市立穴生中学校長　田原憲一）

響け！　歌声

心の交流

チェコ少年少女合唱団

世界で広く活躍するチェコのトップ・アンサンブル。1932年創設。70年の歴史を通じて，多数の才能に恵まれた子どもたちを音楽と芸術の世界に導き，多くの優れた指揮者，作曲家，歌手，演奏家，音楽監督を世に送り出してきた。98年のヨーロッパ・グランプリをはじめとして，数多くの権威ある賞を受賞。定期的に著名音楽祭に出演し，多くの海外ツアーも行う。これまでに50枚を超えるレコードやCDをリリース。

北九州市立穴生中学校

北九州市八幡西区のほぼ中央部の西よりに位置。1959年開校。現在生徒数は，特別支援学級を含む15学級487名。8つの運動部と4つの文化部があり，活発に活動している。2007年度は，陸上部が全国大会出場，サッカー部が九州大会出場を果たした。あいさつが気持ちよくできる学校として地域からも注目されている。

「将棋」その魅力を伝えたい

将棋のタイトル戦のほとんどは羽織袴の正装で行われ、それに使われる盤や駒といった棋具は手作りの芸術品でもある。また、対局にまつわる礼儀や作法も事細かに確立されている。江戸時代に幕府に公認されたという歴史的な背景もあって、将棋は世界に誇れる日本文化の一つだと思っている。

在英日本大使館でのトーナメント

また、取った駒の再使用という日本将棋独特のルールは、ゲームをより深いものにし、「引き分けが少なく、逆転が多い」というゲームとしての優秀性につながっている。

私は平成一九年度の文化交流使の指名を受け、日本文化としての将棋を海外に紹介するために、フランス、イギリス、ドイツ等を回ってきた。

しかし、ヨーロッパにはすでにチェスが普及していて、漢字の駒を使用する「将棋」の認知度は残念ながらまだまだ低いのが現状だった。

チェスとの比較で説明すれば、将棋の独特のルールに興味は示してもらえるが、駒の漢字の識別は西洋人にとってはかなり大変なようだった。そのため、日本から持って来た解説用の大きなマグネットの駒にアルファベットの文字を貼り付けたりもした。

ドイツでは将棋とチェスのトッププレーヤー同士のインターネット対局をメインにしたイベントを実現させることができた。また、イギリスでは学校を回るワークショップで小学生から高校生までの年代の子どもたちに将棋を楽しんでもらった。

二月末には在英日本大使館で、子どもたちのトーナメントを行ったが、大会終了後に何人もの子どもたちに将棋の盤駒を譲ってほしいと頼まれた。これは、少しずつだが確実に将棋が親しまれていくのが実感できたうれしい出来事だった。

昨年八月末から九か月間、今年の五月末までの活動になるが、四月には日本からプロ棋士三人を招いた大規模なイベントをパリで行う。

少しでも多くの人に来てもらい、少しでも多くの人に将棋の魅力を伝えたいと思っている。

将棋棋士
本間　博

プロフィール

1958年生まれ。1975年森安秀光九段門（5級）。2006年六段に昇段。2003年～2006年将棋連盟関西研修会幹事。ヨーロッパ，米国，中国において海外への将棋普及活動にも取り組む。週刊将棋紙にコラムを連載。2007年8月～2008年5月（予定）まで，文化交流使としてフランス，英国，ドイツ，スペインで活動。

「第五回文化庁文化交流使活動報告会」開催

三月一三日、東京藝術大学奏楽堂において、『日本の心を世界に伝える』をテーマに「第五回文化庁文化交流使活動報告会」が開催されました。

「文化庁文化交流使事業」は、芸術家、文化人等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、日本と外国の文化人とのネットワークづくりにつながる活動を展開することを目的とした事業です。

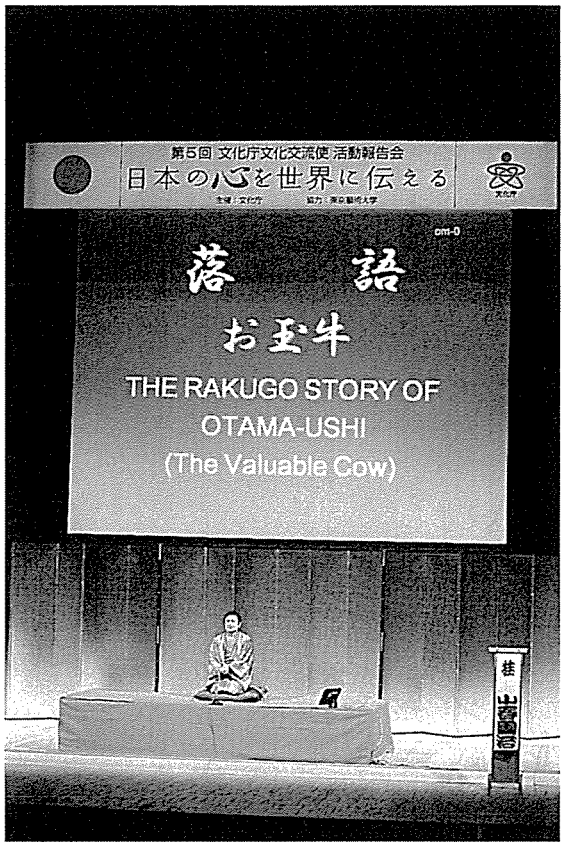
今回の活動報告会には、海外での活動を終えた文化交流使による報告に加え、日本舞踊家の勝美巴湖氏、人形浄瑠璃文楽　三味線の豊澤富助氏による実演が行われたほか、落語家の桂小春團治氏は、英語字幕システムを使った『お玉牛』の実演と小物の使い方などの落語の初歩的な解説も行い、海外での活動の雰囲気が生き生きと再現されました。また、イギリスから来日したジャパン・ソサエティーのハイディ・ポッター氏より、受入側からみた文化交流使活動についての紹介があり、日英間の文化交流における文化交流使の役割についても披露いただきました。

この他の出演者は、坂手洋二氏（劇作家・演出家）、立松和平氏（作家）、寺井栄氏（能楽観世流シテ方）、寺内直子氏（神戸大学大学院国際文化学研究科教授・音楽学）、名嘉睦稔氏（画家）、中村享氏（盆栽作家）、三浦友馨氏（華道家）、湯山東氏（日本画家）の合計一一名。各々が実際の活動時の写真や映像などを用いて、海外各地での活動の様子や、現地の反応などを報告しました。

続いて、出演者全員が参加し、パネルディスカッションが行われ、伝統芸能、文学・演劇、美術の各分野の目線から、自らの体験に基づいて、苦労・工夫した点や感想を述べました。

会場では、一般の傍聴者約三一〇名が、文化交流使の報告を熱心に聞き入っていました。

（長官官房国際課）



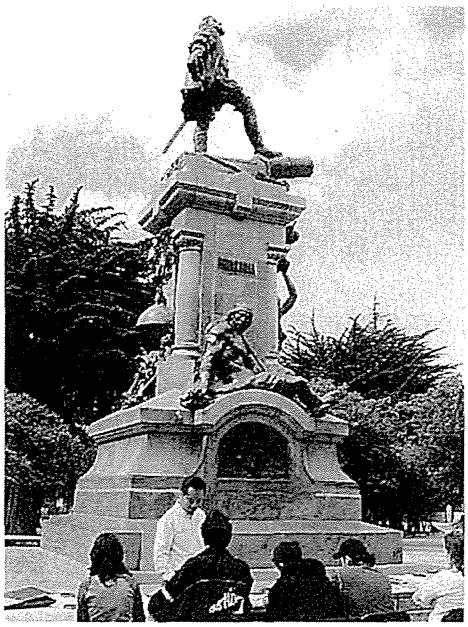
桂小春團治氏の実演

中村享氏の報告

パネルディスカッション

南米大陸最南端の若き碁ピープル

昨年の一一月に、チリのサンチャゴを訪れ、観光名所サンタルシアの丘でデモンストレーションを行った。私とチリ人一五人が同時に対戦した時、中に二〇歳くらいの女の子が対戦相手として座っていた。ヨーロッパでは、囲碁を打つ人の約一割が女性なのだが、南米ではとても少ない。めずらしさもあり話してみると、プンタ・アレーナスというところから来たという。私はその時、その街がどこにあるのか知らなかったのだが、デモンストレーション後の食事の席で、それがサンチャゴから飛行機で四時間かかる、マゼラン海峡に面した南米大陸最南端の街、ということがわかった。南極からそう離れていないところで、囲碁を楽しんでいる人がいるということに、私はとても驚いた。


プンタ・アレーナス，アルマス広場での活動

彼女は他の日本文化にも興味があるようで、私に日本人の歌手やバンド名を数組ほどスムーズに書き出して見せた。また、マンガやアニメにも詳しく、人気キャラクターをTシャツにプリントしたりしていた。彼女が囲碁に興味を持ったのも、数年前に囲碁マンガ「ヒカルの碁」を読んだことがきっかけだった。それから彼女は、同じように囲碁に興味を持った友達とクラブをつくり、仲間を集めた。当初は二〇人ほど集まったようだが、現在は一〇人前後と減ってしまった。悩んでいるようだったので、何か手伝いができればと思い、一月に訪れる約束をした。

プンタ・アレーナスは、チリ・マガジャネス州の州都。人口約一一万人。囲碁クラブでは、私が訪れることを現地の新聞を利用して告知してくれていた。また彼女自身がつくったポスターが、町の中心にたくさん貼られていたのにはまた驚かされた。クラブのメンバーに会った時にはもっと驚いた。リーダーは二〇歳の男の子で、彼女は一九歳でアシスタント。メンバーは一〇代がほとんどで、中には一〇歳の男の子もいた。若い彼らが、自分たちでつくった碁盤や碁石、テキストなどを使い、公共の施設を利用し、活動していたのだ。

当日私は、町の中心アルマス広場のマゼラン像の下に碁盤を並べ、デモンストレーションを行った。リーダーを中心としてメンバーたちは、興味を示して集まった人々に囲碁を紹介する冊子を配り、熱心に囲碁を教えていた。意欲あふれるたくましい若者たちに、私は囲碁普及の活力をもらうと同時に、未知の可能性を強く感じた。

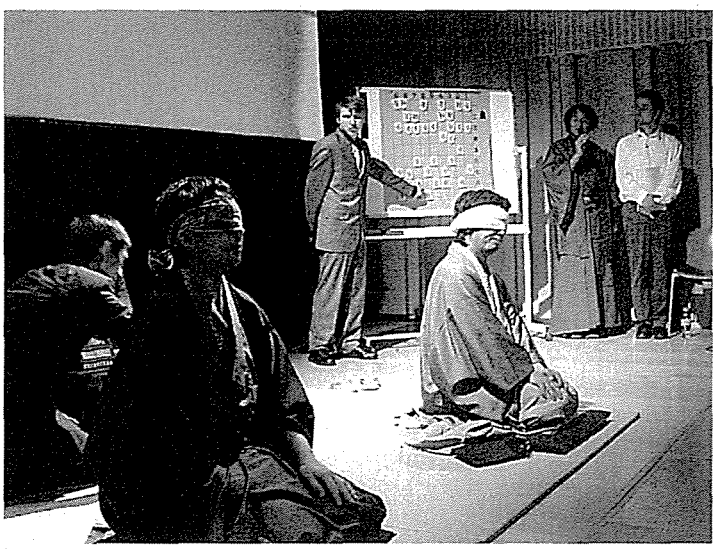
囲碁棋士
円田秀樹

プロフィール

1966年生まれ。辻井良太郎7段門下。1983年入段，2002年9段に昇段。1989年棋聖戦5段戦優勝，1994年第25期新鋭トーナメント優勝。初タイトル獲得，1994年松原賞，2007年通算400勝達成。イスラエル，トルコ，ロシアなどにおいて海外での囲碁普及活動に取り組む。2007年10月から2008年7月まで文化交流使として，ブラジル，中南米諸国，アフリカにて活動。

世界中で将棋を

昨年八月末から今年五月末まで、文化交流使としての九か月間の活動を何とか無事に終えることができた。なにぶん初めての経験なので、今考えると、もっと「ああすれば良かった」「こうすれば良かった」という反省点も少なくないが、この貴重な経験を今後の普及活動に少しでも活かせればと思っている。


目隠し対局

将棋という日本の伝統文化はスポーツ等と違い、観るだけではわからず、楽しめないのが残念なところである。ルールを覚え、しかもある程度の実力を身に付けてもらわなければプロの高度な技術や妙手も理解してもらえないのである。

そして将棋にはルールを覚える際にも漢字という難関が待っている。立体的なチェスの駒なら一目で区別できるが、将棋の駒は書かれている漢字で判別しなければならない。さらに将棋の駒には裏と表もあり、外国人にとってのその難しさは我々日本人には計り知れない。

ただ、入門者用のアルファベットの駒等を普及させ、その入り口さえクリアーすれば、将棋のもつゲームとしての優秀性に加え、日本の伝統文化としての様式美に魅せられる外国人の熱心なファンも多いと確信している。

日本からプロ棋士を招いたパリ日本文化会館での大型ワークショップでは、多くのフランス人に羽織袴の正装での対局をお観せし、また、目隠しでの対局には深い興味を示してもらった。

ロンドンの学校でのワークショップや、ミュンヘンでのネット対局、モナコやマドリード、デュッセルドルフでのイベント等々。これまでたくさんの人々に将棋を紹介してきたが、今はまだ種を撒いて少し水をやってきたのに過ぎないだろう。

ようやく芽生え始めた芽をこのまま枯らせてしまいたくはない。そのためには、現地のファンのご協力が欠かせないが、是非ともまた棋士の海外派遣をお願いしたい。

いつの日にか世界中で日本の将棋が指されることを願いつつ、文化交流使としてのご報告とさせていただく。

将棋棋士
本間　博

プロフィール

1958年生まれ。1975年森安秀光九段門（5級）。2006年六段に昇段。2003年～2006年将棋連盟関西研修会幹事。ヨーロッパ，米国，中国において海外への将棋普及活動にも取り組む。週刊将棋紙にコラムを連載。2007年8月～2008年5月まで，文化交流使としてフランス，英国，ドイツ，スペインで活動。

平成二〇年度文化庁文化交流使指名書交付式

六月九日、東海大学校友会館において、「平成二〇年度文化庁文化交流使指名書交付式」が開催され、青木長官から、今年度海外派遣型文化交流使になっていただく方々に指名書を交付しました。

「文化庁文化交流使事業」は、芸術家、文化人等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、日本と外国の文化人とのネットワークづくりにつながる活動を展開することを目的とした事業です。

今回、指名が決定した海外派遣型文化交流使（八名）の方々と派遣国は、次のとおりです。

梅若猶彦／能楽師（シテ方）、静岡文化芸術大学教授／フィリピン
小林千寿／囲碁棋士／フランス他
島田雅彦／作家／米国、韓国
須田賢司／木工芸作家／ニュージーランド
千宗屋／茶道家／米国他
常磐津文字兵衛／常磐津三味線奏者、作曲家／韓国
中川衛／重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者／米国
福田千栄子／地歌箏曲演奏家／フィリピン、インドネシア、マレーシア

指名書交付式で、青木長官は、「国際化が進展する中で、我が国の文化を積極的に海外に発信することは、国際社会における日本の存在感を高める上で、また我が国の文化を振興する上で重要」と挨拶し、文化交流使の活動への期待を述べました。

加えて、現地滞在者型（二名）、短期指名型（五団体）の指名も次のとおり決定しました。

現地滞在者型
上野宏秀山／尺八奏者／シンガポール
ブーイ文子／茶道家／タイ

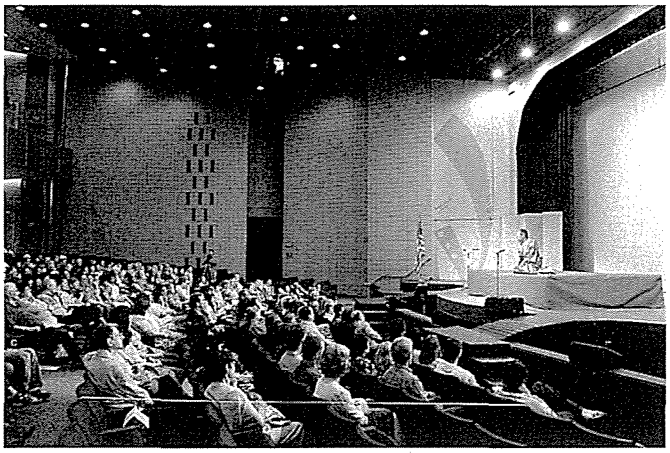
短期指名型（平成二〇年度新設、国際芸術交流支援事業（文化庁）により海外で公演を行う芸術団体が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行います）

大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」ロンドン公演実行委員会（歌舞伎）／英国
鬼太鼓座（和太鼓）／ブラジル
太神楽曲芸協会（太神楽曲芸）／カンボジア
舞踊集団菊の会（舞踊（邦舞））／ブラジル
財団法人日本伝統文化振興財団（狂言）／インドネシア

文化交流使と文化庁幹部

アメリカ一周RAKUGO伝道の旅

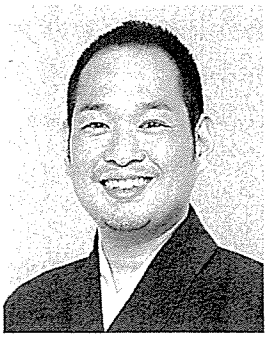
三月より文化庁文化交流使として米国各地で英語落語公演を行った。広大な国土をもつ米国において、一人でも多くのアメリカ人に『日本独自の笑芸＝落語』を知ってもらうため、車に落語道具を積み込んで移動した。四月にニューヨークをスタート。ミズーラ、スポケーン、コベリス、シカゴ、ミルウオーキー、デモイン、アナポリスなど、通常日本文化公演が行われないような田舎の地域も含め、一万七〇〇〇km以上を走破。四〇都市で六五公演、のべ一万三〇〇〇人以上のアメリカ人に落語を楽しんでもらった。


インディアナポリスでは500人以上の観客を集めた

今回は事前の計画以外にも、即席的に、キャンプ場、バー、レストランなどでゲリラライブを行い、日本について興味のなかったアメリカ人にも日本の笑いを実感してもらった。『一体、何が始まるの？』という不安そうな観客の顔が、最後には一杯の笑顔になっていく。改めて『RAKUGO』の芸の力を感じた。公演が大変好評で、あちこちから追加公演の依頼が殺到、当初予定していた四〇公演から、結局六五公演を越えるまでになり、ボルチモアでは、『オタクコンベンション』という日本のアニメファンが三万人集まるイベントに落語家として初めて招待されることになった。客席はアニメやゲームのキャラクターに扮装したアメリカ人の若者でぎっしり。六五〇人の会場に九〇〇人以上が押しかける大変な熱気。今回の公演では私の実演の間に『落語の歴史』『落語家の師弟関係』をわかりやすく、ギャグを交えて楽しく解説するDVDが流れる。落語の成り立ちや落語界の仕来りなど、落語の側面もおもしろおかしく学んでもらえるという幅広い内容である。アニメファンの皆さんは日本に対する好奇心が豊かで大変すばらしい反応。最後は全員が立ち上がってスタンディングオベーション!! アメリカの若者に落語が受け入れられたことは大いにうれしかった。

ユタ州モニュメントバレーでは、ネイティブアメリカンナバホ族の皆さんに公演を行った。ナバホ族は過去の不幸な歴史からか、あまり外部に対して心を開かないと言われており、実際街を歩いても彼らの笑顔を見かけることはなかった。開演前には不思議そうに遠くから離れて見ていた観客が次第次第に近寄ってきて、終演後は全員が集まり、サインと握手攻め。「RAKUGOはすごい！日本はすごい！」「日本が好きになった」とうれしい感想をたくさん聞かせてくれた。笑い合うことで、異文化の者同士が心から仲良くなれる。そんな瞬間を身をもって経験させてもらった。

落語家
桂かい枝



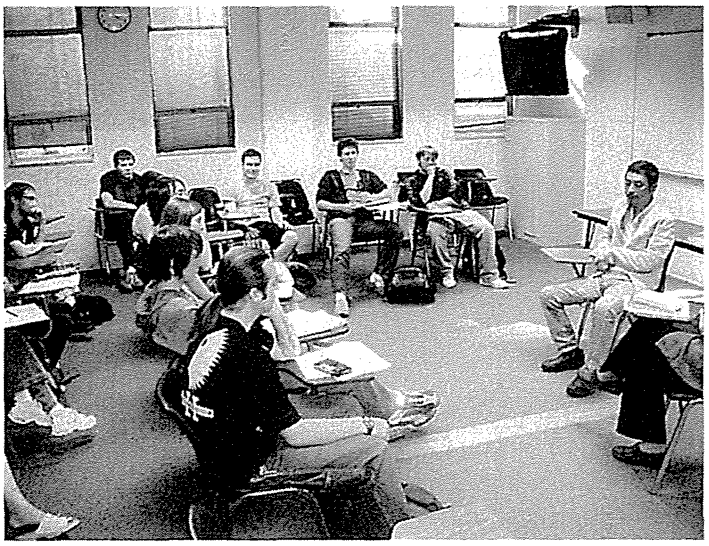
プロフィール

五代目桂文枝門下。1998年より日本独自の笑芸『RAKUGO』の魅力を世界の人々にも伝えたいと英語による落語公演を始め，これまでに世界12か国61都市で270回を越える公演を行う。カナダのコメディーフェスティバル『Just for laughs』にも招待されるなど文化紹介を越え，エンターテインメントとしても世界的に高く評価されている。2008年3月～2008年10月，文化交流使として，米国で活動。

茶室の世界化

人類の神話には驚くべき共通のパターンがある。言語の構造もまた共通である。同じように住まいの構造も基本的には似通っている。神話も言語も住まいも人間の脳や身体の構造によって、あらかじめ規定されているからだ。

人にとって理想的な空間も突き詰めれば、その広さも形も構造も素材も一つの原型に帰着するのではないか？　その原型的な空間をユニット化することはできないか？


現代日本文学ワークショップ

これが私の文化交流使としての活動の発端である。そのためのコンセプトを考えて、それをNirvana Miniと名付けることにした。Nirvana Miniはとても多機能、多目的な空間である。それはとても狭いが、古今東西の家の基本形をなぞっている。そして、それは極めて茶室に似た空間になる。

世界にはさまざまな家や部屋がある。家や部屋もまた、文化や言語と同様、多様性に満ちたものだ。しかし、それらにはどこか共通点がある。自分の体のサイズに合った小さな部屋、籠って内省したり、他者と語り合ったり遠い先祖の記憶を呼び戻したりする。茶室もまたそんな機能をもっていた。また、日本人は「場」というものを重んじる。独自の接待文化、対話の文化、関係の文化は、場に対する強烈な意識の反映だった。

折しも、アメリカはサブプライム・ローンの破綻から、未曾有の大恐慌に突入しようとしている。こういう時期だからこそ原点に回帰をうながす文化イベントおよび啓発ビジネスが生きる。大統領選挙のある一一月四日、隈研吾、團紀彦、竹山聖の三人の建築家および私と同じく文化交流使としてアメリカに派遣されている茶人千宗屋氏の協力を得て、ワシントンで大規模な展示とプレゼンテーションを行う予定で、今準備を進めている。すでにNirvana Miniのコンセプトはアイオワ大学のワークショップで試験的に発表し、大いに関心を呼んだ。今後もこのコンセプトの宣伝に努め、全米規模のコンペを実現させたいと考えている。

今や日本といえば、アニメ、ゲーム、おたくのイメージでとらえられているが、世界的普遍性をもったコンセプトとそれに基づく造形を発信してゆく潜在的な力をもっている。

作家
島田雅彦

プロフィール

1961年東京生まれ。東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』で小説家デビュー。主な作品に『彼岸先生』(泉鏡花文学賞)，『僕は模造人間』『自由死刑』『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）などがある。オペラ台本にはオペラ『忠臣蔵』『Jr. バタフライ』がある。文藝家協会理事。法政大学国際文化学部教授。2008年7月から2009年3月（予定）まで文化交流使として米国，韓国で活動。

フィリピンでの内面の景色

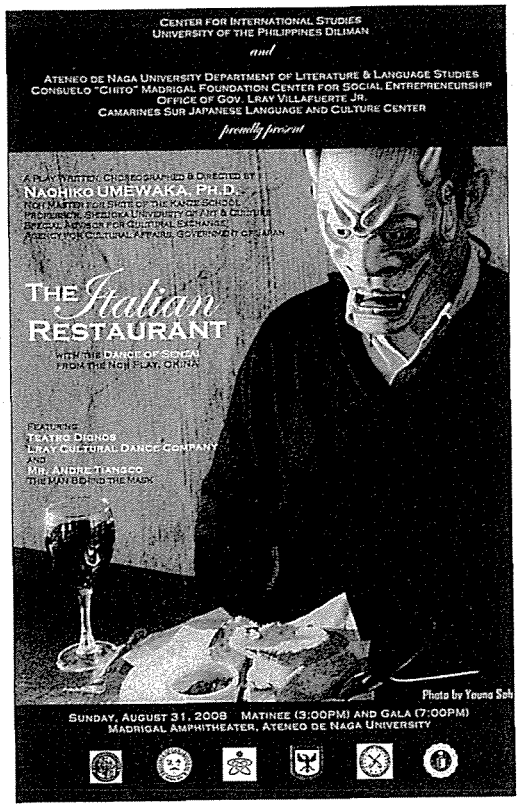
文化交流使として、八月から一か月間フィリピンに行った。滞在中は、自分ができる限界まで限られた時間を有効に使いながら、能を媒体とする文化交流活動をこころみた。そのメニューは次に記しているが、参加者や場所によって、メニューの組み合わせ、割合を変え、自分なりのブレンドをつくるべく工夫したつもりである。

A　能の実技指導（千歳之舞、中之舞、例外的に乱拍子）

B　講演と授業

C　舞や謡の実演（道成寺の謡と乱拍子、天鼓の独鼓、橋弁慶の独鼓）

D　能劇（または現代劇）「イタリアン　レストラン」作／演出：著者（能の時空間の使い方やそのテーマ設定を模倣した作品であり、能面を現代という状況下において使用する）



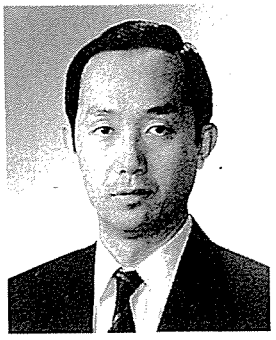
活動時のポスター

企画はすべてフィリピン大学デイリマン校CIS（Center for International Studies）によって具体化されたもので、その中心人物として同大准教授、所長代理のアンパロ・アデリーナ・ウマリ博士がおられる。ウマリ博士は同志社大学大学院にて能の研究で博士号を取得されており、著者自身もいろいろな面で勉強させていただいた。

過密なスケジュールであったために、活動期間中は、到着先ですぐに大学や施設内での仕事に取りかかる場合が多く、一般的にいわれている観光はほとんどできなかった。この時期、観光客の多くが訪れるCagayan de OroやNagaといえば、見どころが多く、大自然とその景色といったら言葉では言い表せないだろう。精神が浄化されるのが大自然だと思う。今回、それができなかったことは残念だが、その代わりに、著者は交流使としての活動をとおして、もう一つ別の景色、フィリピン人のすばらしい「心」という内面の景色に触れそれに感動した。

最後になったが、フィリピン大学のE・ロマン総長、デイリマン校のセルジオカオ学長ならびに在フィリピン日本国大使館のご配慮と歓迎に感謝を申し上げたい。

能楽師（シテ方）
静岡文化芸術大学教授
梅若猶彦



プロフィール

3歳にて仕舞「猩々」で初舞台。能楽師としての活動以外に数多くの創作能，創作劇・舞踊において演出・振付等を担当し，脚本も手掛け，新たな身体表現を探求している。アメリカ・フランス・ブラジル・イタリア・チュニジアでの能楽公演団の団長を務めるなど日本の古典である能の普及に尽力している。ロンドン大学ローヤルホロウェイ博士号取得。2008年8月から9月まで文化交流使としてフィリピンで活動。

寄席文字、英国・欧州へ

一年間、文化交流使として英国・ロンドンに滞在し、落語の世界の文字である寄席文字を紹介する活動を行っています。『興行の世界の文字』としては初めてのこと。江戸文字四書体（歌舞伎・相撲・落語・千社札文字）の違い、寄席文字はその内のひとつであることを紹介する機会をいただいたことは大きな意義と責任を感じています。講演・実演・ワークショップを軸に英国内はじめ、周辺国での活動も行っています。前半は英国の現地学校、日本文化紹介催事などでの活動を中心にネットワーク構築にも努めました。学校ではプロジェクターを駆使し、英語による講義は落語の説明から始めています。

ロンドン・ロッディング・バーレイ高校での実演とワークショップ

後半は多々企画、提案を軸に今後につながる活動を計画・実施しています。落語・寄席を認識していただくことが寄席文字紹介の入口だと思っています。活動範囲も英国から欧州周辺国へと広げています。活動の中でいただく寄席文字の筆法・美意識に対する感嘆と称賛の声が励みとなっています。

多くの方々のご尽力をいただき、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、ハンガリー・エトヴェシュ・ロラーンド大学（通称・ブダペスト大学）、ドイツ・フランクフルト日本語普及センター等への落語CD・DVD（カバー寄席文字・右門筆）の寄贈が決定し、寄贈式なども計画しています。一月からは寄席文字が使われている世界を紹介するため、太神楽曲芸、寄席囃子（三味線・太鼓）の方々にも渡英していただき『寄席文字と寄席の世界』を紹介する公演も計画しています。一一月にはハンガリーの大学でワークショップ・講演を実施しました。一二月から一月末までロンドンの日本大使館での『寄席文字と和の意匠』と称した展示、更に一月にはドイツ・フランクフルトでの活動が決定しています。まずは寄席文字の美しさを伝えることが今後への第一歩。二月の帰国まで文化交流使としての使命を全うすべく奔走します。

寄席文字書家
橘 右門

プロフィール

1955年生まれ。明治大学在学中に落語研究会に所属し，寄席文字と出会う。1980年橘流寄席文字家元・橘右近の門をたたく。1993年橘流寄席文字伝承者として『橘右門』の名を許され橘右近最後の弟子となる。2005年からは英国での活動も行う。2008年2月財団法人板橋区文化・国際交流財団より「国際文化交流特別賞」受賞。2008年3月～2009年2月まで文化交流使として英国で活動。

象嵌技法をとおしての交流

文化交流使としての活動を終えて、はや数か月がたちました。平素の作品制作、教育の仕事に戻りましたが、以前よりも多忙となり、時間に追われる毎日となりました。それは講演、技術指導の依頼や海外からの作品出展、海外展の企画など、当事業によって作品を観た、講演を聞いた方からの相談、依頼、活動打診が入ってきて、対応しているためです。早くも文化交流使事業の効果が出始めています。

二〇〇八年九月八日から四四日間ニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルスで伝統工芸の金工、象嵌技法について実技指導を行いました。今日、日本でも知る人が少なくなったこの技法を海外で理解してもらえるか半信半疑でありましたが、日本の伝統工芸に関心をもっている方々を中心に、伝統の技を使って作品制作ができることが興味を引き、どの会場でも熱心に作業をこなされていました。

ワシントン　コーコラン大学での実技指導

例えば、ワシントンのコーコラン大学ではジュエリーとデザインの先生、学生に教えましたが、まず、日本の金工（彫金、象嵌）の特徴や作品の現状を知ってもらうため、大学と美術館で私の作品を展示し、技法や形状、加飾の意図について解説した後、図録とDVDを使って講演を行いました。実技前には作業道具、材料、古美術品、海外の参考品を手に取ってみてもらっての講義を行っていきました。

技術指導も七日間と十分に時間をとり、事前に用意していた日本独特な合金材料である四文一のペーパーウェイトに象嵌を入れる作業を、デザイン、彫り、嵌め込み、研磨、着色と手順を追った工程で実施していきました。簡単な線象嵌だけで終わらせる予定でしたが、面象嵌、重ね象嵌と難度の高い作業にも挑戦したい方や、ジュエリーに技法を取り入れたいので自分の道具を作りたい方も出てきて、六日間で作品を仕上げ一日を道具作りに充てるほど興味津々に取り組んでもらえました。

作品展示解説、講演、実技指導と三段階で理解を求める活動と、鏨作りに石鹸を使い、研磨には木炭、着色には大根を使用する日本の古来からの手法の紹介を実際に行ったことが大きな興味を引き、効果的に進められたと思います。

今後、象嵌が米国においてジュエリーやコンテンポラリーアートの中に新しい感覚で融合され、日本の伝統工芸にない新しい作品が多く出てくることを期待します。

重要無形文化財「彫金」
（各個認定）保持者
中川　衛

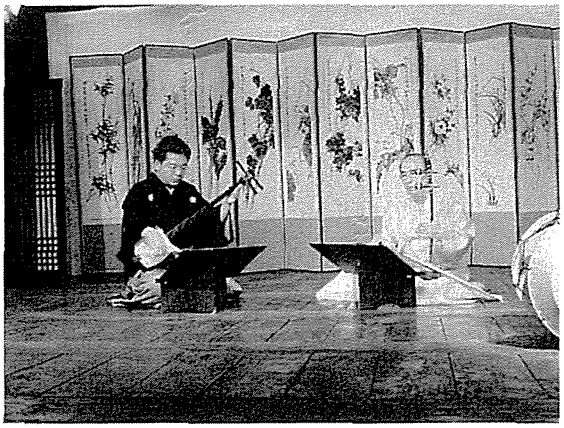
プロフィール

1947年生まれ。74年加賀象嵌の高橋介州氏に師事。79年日本伝統工芸展初入選，82年日本工芸会正会員。03年北國文化賞，04年重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者の認定を受ける。加賀藩伝統の加賀象嵌を受け継ぐ第一人者。金沢美術工芸大学工芸教授，日本工芸会参与・常任理事，金沢市工芸協会理事長。2008年9月から10月まで文化交流使として，米国にて活動。

ソウルでの文化交流使活動

文化庁文化交流使として平成二〇年九月二七日より一か月間、韓国ソウルで活動しました。活動にあたっては、大学での特別講義、一般の方々に広く日本音楽に接していただくためのレクチャーコンサートや演奏会の開催、の二つの分野を中心に活動計画を立てました。

大学での特別講義に関しては、驚くべきことに、ソウル到着以後も各大学からの講義依頼が増え続け、国立ソウル大学校、国立芸術総合学校をはじめ、九校で、三味線、常磐津の講義を行うことができました。学生の皆さんの日本音楽に対する興味が非常に大きくて各校とも質問が多く、ほとんどの大学で実施したアンケート調査の結果、日本音楽や三味線、常磐津に関して興味をもったかとの問いに九〇％以上の学生の皆さんが「興味をもった」と答えているのは大きな収穫でした。


金教授との新作発表

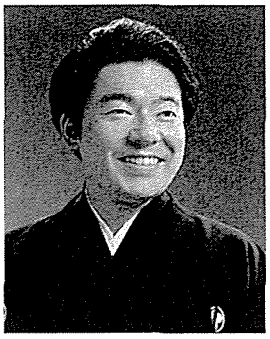
演奏会の開催については、まず、在韓日本大使館の協力により、大使館の文化施設である「公報文化院」において常磐津と三味線に関するレクチャーコンサートを行うことができました。ホールの定員を上回るお客様にご来場いただき、コンサート後も質問が長く続き、とても幸せな時間を過ごすことができました。

いま一つの大きな収穫は、私の作曲家としての活動として、前出、国立芸術総合学校の教授で、コムンゴ（棒を撥のように使い弦を弾く琴）、ヘグム（胡弓の仲間）奏者、作曲家である、金泳宰（キムヨンジェ）教授と二人で、それぞれの自作曲と古典の演奏会を開けたことでした。韓国音楽との共作共演は驚くべき音楽体験でした。今回の滞在では、「三つのアリランのテーマによる三味線独奏曲」「サランガのテーマによる三味線独奏曲」「コムンゴと三味線の為の―架け橋の上で―」の三曲を作曲初演することができました。

滞在中、食事はおいしいし、韓国の皆様にはあたたかく接していただけるし、生活上の苦労はまったくありませんでしたが、作曲家としては筆の遅い私は、初演曲すべてをソウルで仕上げることとなりました。活動報告書に記載した活動の回数は二〇回を数え、活動以外の時間は、寝る間を惜しんで作曲、講義講演の資料づくり等に費やしたので、ソウル滞在中のほとんどの時間を交流使活動に捧げ切った充実感があります。

今後も韓国には年一回程度、自分で交流に出かけることになると思います。

常磐津三味線
奏者・作曲家
五世 常磐津文字兵衛

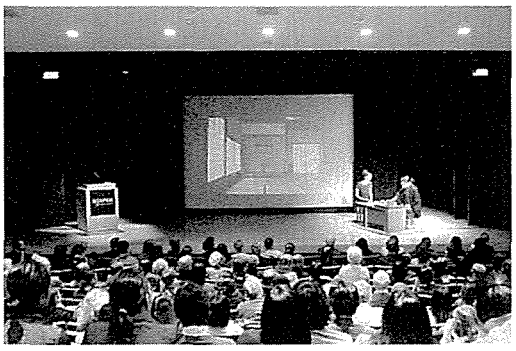


プロフィール

1961年東京生まれ。84年東京藝術大学卒業。92年第5回清栄会奨励賞受賞。94年東京藝術大学音楽学部非常勤講師。95年歌舞伎立三味線。96年五世常磐津文字兵衛を襲名。2004年国立劇場特別賞。05年早稲田大学演劇博物館客員講師。歌舞伎公演へ多数出演の一方，作曲家としてTVコマーシャルから現代音楽まで多くの作品を作曲。

茶味心交

文化交流使として米国ニューヨークを拠点とし、欧州などに足を延ばして茶の湯の普及と啓発のための活動を続けて早半年以上が過ぎた。これまでも家元とともに海外で茶の湯を紹介するデモンストレーションや講演を各地で行ってはきた。しかし、茶の湯は日本の他の古典芸能とは異なり、観客と演じ手の区別がない参加型の芸術である。しかも茶を飲むというきわめて日常的な行為を根幹とした生活文化であるので、いっとき出向いて見世物として単発で行っても正しい意味や在り方を伝えることは困難であった。しかし今回、長期間滞在することで継続した文化交流・普及をもくろむこの制度なら、暮らしながら生活の中で茶の湯を楽しむという、本来の在り方を提案することが可能である。

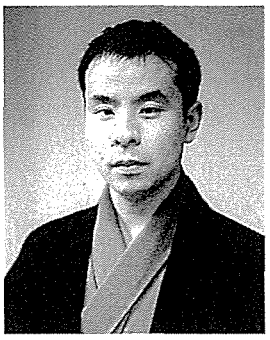


2009年2月10日
ニューヨークジャパンソサエティ講演会

主だった活動としては、ニューヨークの中心ロックフェラーセンタビル最上階サロンでの「重陽天空茶会」（九月八日）に始まり、アジアソサエティでの「亜細亜茶会」（一〇月四日）、一一月にはパリに飛んでプチパレ美術館「相国寺金閣銀閣名宝展」での講演とワークショップ（八、九日）、ドイツベルリンにおいて大使公邸（二二日）と東洋美術館の茶室（二三日）でそれぞれ茶会を行った。美術館収蔵以来初めて桃山時代の志野茶碗等館蔵品を使用することで、生きた日本文化として茶の湯が継続している歴史の重みを感じてもらうことに成功した。一二月にはニューヨークに戻り、総領事公邸（二、四日）とジャパンソサエティ（八日）でもそれぞれ茶会を、年明けて二〇〇九年一月には正月独自の茶会である初釜を数回行い、生活に根ざした年中行事と密接にある茶の湯の姿も紹介することができた。二月には再びジャパンソサエティで大型講演会、欧州に再訪、ベルギー・ブリュッセルではEU議会場（一七日）、パリでユネスコ大使主催にて同関係者を招いて（二四日）と、それぞれ国際的に認知度を効果的に上げることができる場でも茶会を催すことができた。

これら大型企画はそれぞれ大きく成果を上げているが、自身としては冒頭のような理由から個人宅における少人数での茶会や、定期的に継続した愛好者を育てるためのワークショップなどにより意を注いでいる。幸い昨暮よりニューヨークでは定期的に小規模ワークショップを開催、地道ながら継続した愛好者を生むなど成果を上げつつある。また茶室以外での茶会の開催など、現代の生活と茶の湯の接点の提示に今後もより意を注ぎたいと考えている。

茶道家
千　宗屋



プロフィール

茶人（武者小路千家家元後嗣），美術史家（日本中世）。
1975年，京都市生まれ。明治学院大学非常勤講師。現代に生きる茶の湯の在り方をテーマに文化庁文化交流使として，2008年7月から2009年6月まで，米国，フランス，イタリア，イギリス，ドイツで活動。

碁は日本で育てられた文化

最近の世界の囲碁界は急速に変化しています。

その大きな理由はマンガ『ヒカルの碁』です。このマンガは世界の若者たちの日本マンガブームに乗って多くの国々で訳されアニメも各国でDVDになりました。その影響は大きく世界の若者たちが碁に興味をもち、その後、インターネットで対局をして碁を覚えた人たちが急増しています。

若者たちは集中力も学習能力もありますから、どんどん強くなります。ところが、欧米には、まだプロ組織がなく、指導者不足です。そんな状況に囲碁人口が多い中国からプロ棋士、元院生、韓国のアマトッププレイヤーたちが欧米の囲碁大会に参加、そのまま留まるようになってきています。それは、欧米ではアマの囲碁大会にも賞金が出ることに起因します。また、指導者がいないので、各国で強いアジア人プレイヤーが滞在することが喜ばれています。

インターナショナルスクールにおける碁のワークショップ

三、四〇〇〇年前に中国辺りで生まれ、四世紀ごろ、韓国から伝わった碁は日本で熟され平和な徳川時代に世界初めての専門棋士を誕生させました。やがて、一九世紀の開国と同時に碁は日本から世界に広められます。そして、つい最近まで碁は世界の一部のインテリジェンスな人たちの知的ゲームでした。それが、この数年、マンガ、インターネット碁を通じた国際化により大衆にも親しまれる『ゲーム・碁』になってきているのです。

今、世界で広がりつつある、勝つことだけが目的の『ゲーム・碁』はマナーを重んじ『棋の道』を極める精神性を問う日本の碁から徐々にかけ離れてきています。

そのような背景の中、文化交流使として私はパリ日本文化会館の囲碁講座・ウィーン広報センター・ドイツ日本大使杯などをはじめ、すべての場所で、正真正銘の日本の碁を伝えることを目指しました。

今の世界の流れの中で碁を勝負だけ争うゲームとして広まった場合、日本が育てた『品性、潔さ、調和』などがないがしろにされてしまう可能性があります。これを大切にしてきた日本が、もし何も言わなかったらただのゲームになってしまう心配をしています。

それを間のあたりに見たのは、インターナショナルスクールで一六〇名の生徒に碁のワークショップをさせていただいた時のことです。

盤に向かう生徒の姿勢をなおすとき『このゲームは日本では高貴な人たちのゲームでした』源氏物語のお殿様・お姫様たちが碁を打つ絵巻を見せながら『今日は皆さんが王子様、お姫様ですよ』と言った途端に生徒たちの背がすくっと伸びエレガントになりました。

最後になりますが文化交流使として世界の多くの人たちと出会えたことが最高の喜びです。

囲碁棋士
小林千寿

プロフィール

1954年生まれ。4歳よりアマ5段の父から囲碁の手ほどきを受け，6歳で木谷実9段に入門。1972年（財）日本棋院に入段（初段），1977年5段に昇段。女流本因坊3回・女流鶴聖3回・棋道賞受賞。ヨーロッパ各国・北米・アジア等，30か国以上において，海外囲碁普及に取り組んでいる。2007年8月～2009年3月まで，文化交流使として，フランス，オーストリア，ドイツ等で青少年を中心に囲碁普及活動。

活動を終えた今

平成二一年二月一七日、私は九三キロの荷物とともに単身で成田から旅立った。いよいよ文化庁文化交流使としての活動の日々が始まる。半年以上の準備期間の中で現地とのやり取りを繰り返しながら、自分がいったい何ができるのかを模索してきた。文化交流使という制度においての「私の場合」を最良の形に創造するために、今まで経験して来た海外公演活動とは確かに違うはずの一か月間に大きな期待を膨らませて。

「日本の伝統音楽、日本の楽器に対し幅広い層の人々に理解を求め、伝え広めること。そして、この音楽が我が国の優れた美しい文化芸術として現地の人々に愛され、正しく評価されること」文化交流使として、地歌箏曲演奏家としての私の使命はここにある。箏、三味線そして日本の歌の織りなす音世界。日本人の心が宿り、日本ならではの風土や生活の中で創り上げられた音楽美を未知の異国でどれだけ受け入れてもらえるのだろうか。

現地学生との共演「春の海」
（マレーシア・クアラルンプールにて）

インドネシア・ジャカルタ。活気にあふれるこの都市にはさまざまな階級の人々が存在し、宗教心を強く持ち、貧困や格差などに負けず生きる意欲に満ちている。滞在して日々を重ね、肌で感じるからこそ生まれる土地、国、人々への興味や愛情。それこそが私のエネルギーとなり、演奏家としての本能を奮い立たせる。インドネシア、フィリピン、マレーシア。どの国も異国でありながら同胞であるに違いないアジアをめぐる民族意識を思い知る。相手を知り、認めることによって、何が同じで何が違うのか、何を求めているのか、何を知りたいのかがわかる。そして、彼らは先進国である日本への憧れが強い。想いを受け止め、真正面から向き合って精一杯に伝えたい。しっかり届けと音にのせる。想像力や好奇心が湧き立つように説明する。反応が手に取れる。さらに発信する。まだ求めてくる。お互いに心が躍動していると感じる幸せな時間である。

大学での実演、講義、実技指導、意見交換。現地音楽家との共演。弁論大会やジャズフェスティバルの視察および特別参加演奏。本格的コンサートの開催。TV出演。各機関や文化関係者との情報交換。体力の限りを尽くした一か月。多くを伝え、多くを学んだ。改めて考えた自分、日本、そして文化交流の意。この貴重な経験を後の人生に必ず活かして行く。

平成二〇年度文化庁文化交流使であったことを心から誇りに思う。

地歌箏曲演奏家
福田千栄子

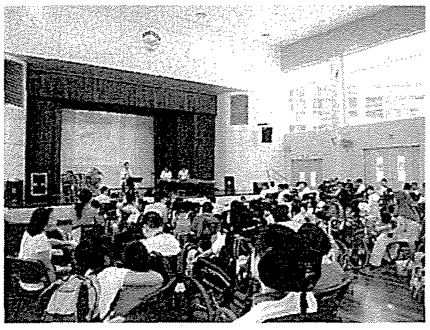
プロフィール

1964年東京生まれ。幼少より父福田種彦に箏・三弦を師事。3歳で初舞台。1993年，史上最年少で文化庁芸術祭賞を受賞。演奏および教授活動の他，伝統音楽の普及にも励む。1999年からは海外（アジア諸国・ドイツ・アメリカ）でのコンサートも実施。社団法人日本三曲協会参与，生田流協会理事，三ッの音会三代家元。2009年2～3月文化交流使として東南アジア3か国で活動。

シンガポールでの文化交流使活動

平成二〇年度「現地滞在者型」文化交流使として三か月間シンガポールで活動しました。都山流尺八奏者として過去二〇年間当地にて幾多の演奏をして参りましたが、「文化交流使」として活動したこの三か月間で実演やワークショップを計二四回実施するというのは思ったより大変な作業で、準備にとても時間を要しました。尺八という日本古来の楽器の音色と楽曲が持つ深い精神性をシンガポールの現地の人々、特に子どもたちに知ってもらいたいと思い、学校公演を本活動の中心とし、主に大学、高等専門学校、中学校、小学校、養護学校などで公演しました。

シンガポールの人口は約四八四万人（平成二〇年六月時点）と近隣国に比べると少ないですが、中華系、マレー系、インド系などの民族が一つの国を形成し多様な文化が混在しています。目覚ましい経済発展の背景には、個々の能力と目的を見定めた教育制度があるといわれています。公立の小学校は一日を午前のクラスと午後クラスの二部制にし校舎を有効活用するなど、徹底した合理主義を貫いています。学力、学歴で生涯収入が予測できるため、子どもの教育にかける親の意気込みは並大抵でなく、おのずと職業選択には無縁とされる文化、芸術方面への関心は低いのではないかという印象を受けました。


養護学校での演奏

昨年の秋口から交流使活動の準備に取り掛かりましたが、小学校からの公演依頼がなく当惑しました。関係者に話しを聞くと、午後二時に生徒の総入れ替えがあるため、授業にゆとりがなく、一部の生徒に行う課外授業は難しいので入れ替え前後、体育館に全校生徒を集めて行ってはとのことでした。シンガポールは熱帯です。長年暮らしているので暑さには慣れていますが、ゆうに一〇〇〇人を超す生徒がすし詰めの、扇風機が回っているだけの蒸し暑い体育館で、神妙な面持ちで尺八を吹いても生徒たちの心に響かないだろうと思い、私の故郷の民謡を唄いました。お囃子が大合唱になって驚きました。用意した一〇〇本の塩ビ製の尺八練習管を生徒たちに交互に吹かせ、音が鳴った子を壇上に誘い一緒に吹くと、拍手喝采の嵐でした。回収したアンケート用紙には子どもたちが日本の伝統音楽に大変興味を持ったと書かれてありました。

文化交流使の大役を引き受けるにあたり、長く日本を離れている私に何ができるか自らを問いましたが、子どもたちの輝いた目を見るのが文化の橋渡し役、現地滞在者型文化交流使の務めと心に決めました。今は活動をやり遂げた充実感に満たされております。これからも文化交流の草の根活動を個人で続けてまいります。

末筆ながら、ご協力を賜った関係者の皆様に心から感謝いたします。

尺八奏者
上野宏秀山

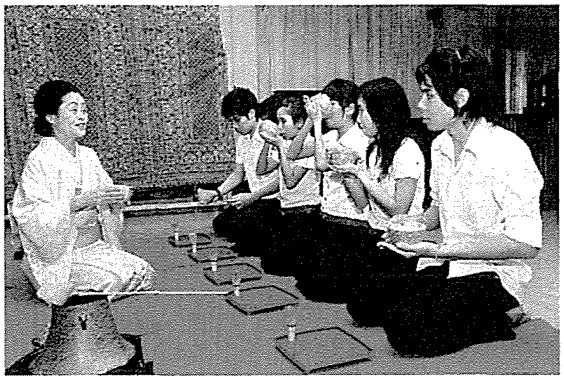
プロフィール

1953年生まれ。シンガポール在住。（財）都山流尺八楽会大師範。尺八を八木宏山，人間国宝山本邦山に師事。シンガポールを拠点に東南アジア各地で尺八の演奏活動をする傍ら，シンガポール人の若い尺八演奏家の育成に励む。シンガポールシンフォニーオーケストラ，シンガポールチャイニーズオーケストラとの共演，世界音楽祭出場等を果たす。2009年２月から４月まで文化交流使としてシンガポールで活動。

茶道とタイ文化の融合

文化交流使として、主にタイ各地の大学と国立博物館で「禅と茶道―タイの陶器も含めて」と題した講演、茶道の実演・ワークショップを行いました。

長年タイに在住し、タイ文化に接してきた者としては、茶道をとおして日本文化とタイ文化、広くは東南アジア文化との融合を目指しました。茶道の歴史、陶器などの日本文化の紹介のみならず、タイや東南アジアの陶器、籠や布などの伝統工芸品を日本の茶道具と調和させ、日本の茶道とタイ伝統文化との一体感がもてる実演を行いました。


茶道の作法について指導を受ける大学生

各大学の講演では、日本語を学ぶ学生も参加しており、互いの文化の共通点に興味をもち、禅とタイ人の信仰する上座部仏教など質疑応答も活発でした。

サイアム博物館での実演には、地方の小学生のグループが参加しました。初めて見る茶道の実演に目を輝かせ、きちんと正座しながら自分で点てたお茶を飲み干す礼儀正しい子どもたちの姿には、私自身が感動しました。

また、かつて日本人町が栄えたアユタヤの国立博物館では、「タイの宋胡録の陶器や沈香などの日本への交易物産にも言及したところ、熱心に耳を傾けてくれました。実演のときには、正面席の尼僧が私の点前を見つめる気配を感じ、大勢の観客の前にもかかわらず、まるで寺で瞑想しているような心地良い仏の世界にいざなわれました。その方が、ご自分の貴重な仏像のお守りを私の手に握らせてくださったことが心に残りました。

タイは折りしも政局不安定の中、バンコクで非常事態宣言が発令され、途中の道路封鎖も懸念されましたが、人々との一期一会が楽しみで、予定したすべての博物館に足を運びました。たくさんの茶道具を抱えタイの地方へ行脚するのは大変でしたが、講演を熱心に聴講され、実演にも熱い眼が向けられた至福の瞬間でした。

互いの文化の交流を通して「和敬清寂」の気持ちが生まれ、真の友好が築かれると思いました。合理主義重視の傾向にある現代社会で、自然の理念と密着した日本とタイの伝統文化の大切さを改めて感じた、という感想もいただきました。

ご支援をいただいた多くの方々には「感謝」の一言に尽き、今後も「直心是道場」で東南アジアの地において、更なる茶道の精進と普及、文化の融合に励みたいと思います。

茶道家
ブーイ 文子

プロフィール

1947年生まれ。タイ在住。タイ国立博物館ボランティア・グループの会長などを経て，現在は，茶道裏千家淡交会バンコク協会副会長兼幹事長，チュラーロンコーン大学非常勤講師を務める。長年にわたり日タイ間の文化交流・国際相互理解の増進に寄与。2007年外務大臣表彰。2009年2月から4月まで文化交流使としたタイ，インドで活動。

平成二一年度文化庁文化交流使指名書交付式

七月七日、東海大学校友会館において「平成二一年度文化庁文化交流使指名書交付式」が開催され、青木長官から、今年度海外派遣型文化交流使になっていただく方々に指名書を交付しました。

「文化庁文化交流使事業」は、芸術家、文化人等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、日本と外国の文化人とのネットワークづくりにつながる活動を展開することを目的とした事業です。

今回、指名が決定した海外派遣型文化交流使（九名）の方々と派遣国は次のとおりです。

海外派遣型（氏名／プロフィール／活動予定国）
青木紳一／囲碁棋士／オランダ、オーストリア、フランス、ドイツ、チェコ
有野芳人／将棋棋士／中国
伊部京子／和紙造形家／米国、エジプト
喜瀬慎仁／三線奏者／フィリピン、中国、フランス、英国
久保修／切り絵画家／米国
竹本千歳大夫／人形浄瑠璃文楽　大夫／チェコ、ドイツ、オーストリア
鶴賀若狭掾／重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者／英国
蜂谷宗苾／香道家元後継者／フランス、モナコ、イタリア、ドイツ、バーレーン、米国
三橋貴風／尺八演奏家／ブラジル、韓国

指名書交付式で、青木長官は、「世界の多くの人々の日本の文化・芸術への理解の促進と相互の交流の推進のため、それぞれの地での文化交流使の方々のご活躍を期待しております」と挨拶しました。

加えて、現地滞在者型文化交流使（一名）、短期指名型文化交流使（五団体）の指名もそれぞれ次のとおり決定しました。

現地滞在者型（氏名／プロフィール／活動予定国）
澤崎琢磨／和太鼓奏者／パラグアイ、ブラジル

短期指名型（団体名／分野／活動予定国）
※国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行います。
NPO法人　和文化交流普及協会／伝統芸能（獅子舞、津軽三味線、和太鼓等）／アルゼンチン
猿楽會／狂言／オーストリア
社団法人　落語芸術協会／落語／カンボジア
株式会社　オフィスK2／和太鼓／ウズベキスタン
ミュージック・フロム・ジャパン推進実行委員会／雅楽／米国

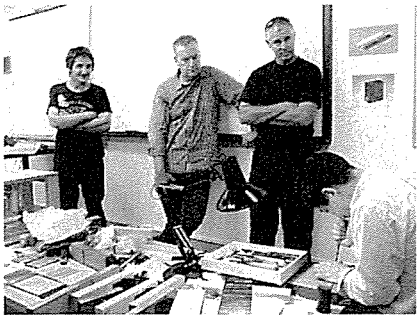
（「文化庁長官」の肩書等は開催時のものです）

文化交流使と文化庁幹部

Kauriの国に使(つかい)して

文化交流使として平成二一年三月から五月までニュージーランドで活動した。

改めてここに言挙するまでもなく、各種素材を駆使し高度な技術に支えられた日本独自の工芸美は〝Crafting Beauty〟として世界的に高い評価を得ている。なかでもこの風土に育まれた美しい木材を用いた木工芸こそ日本の美に相応しいと思うのだが、現実はなかなかそのような評価にはならず木工芸家としては日頃多少歯痒い思いをしている。現存する世界最古の木造建築は日本にある。最大の木造建築も日本にある。これは日本で木の仕事に携わる者の誇りであり自慢でもある。そこで文化交流使として大いに日本の木材の自慢をし、木工芸を紹介しようと勇躍(ゆうやく)機上の人となった。


クライストチャーチの専門学校での実演

しかしこの考えはニュージーランドに着いてすぐ修正を迫られた。私のまったくの不勉強であったがニュージーランドは巨木文化の国であった。表題のKauriこそその代表で樹齢は優に二〇〇〇年を超え、直径四～五m、高さは五〇mにも達し、上空遥か先だけに葉が茂る真っ直ぐな幹の下に立ったときは言葉を失った。しかし一五〇年ほど前からのイギリス統治下で乱伐が進み、今では保護区に残されるだけとなった。あのニュージーランドらしい美しい田園風景はその伐採の跡と知って大変驚いた。縄文杉とそのKauriが姉妹木関係を締結したのはちょうど私の滞在中の出来事であった。

もう一つの課題、木工芸の紹介は成功したといえそうだ。どこの国でも木工品は生活の基本だが、それだけに木を素材とした緻密(ちみつ)な工芸美の存在が新鮮だったようだ。幸いオークランドやクライストチャーチの公的美術館での展覧会が実現し多くの方にご覧いただいた。Christchurch Art Galleryでは立派な会場での講演会が用意され、予想以上に多くの方に集まっていただいた。Craftと日本の工芸の違いなどに触れることができ、これからは〝Kogei〟が世界語として使われることを願った。また私は常々「工芸は触覚の美」と言ってきたが、講義をした各地の専門学校では実際に作品を手で触れその仕上がりを実感し感嘆の言葉をいただいた。しかし、どこでも一番感心されたのは実演で削った厚さ一五ミクロンにも満たない鉋屑(かんなくず)であり、レースのようだ、と大切に持ち帰ってくれた。

はじめての地でこのような成果を上げることができたのは、信じられないくらいフレンドリーに迎えてくれたニュージーランドの皆さん、文化庁、外務省の支援のおかげだが、何より和子氏の奔走によるところが大きい。記して謝意としたい。

木工芸作家
須田 賢司

プロフィール

1954年生まれ。父桑翠(そうすい)のもとで木工芸を始める，外祖父（柴田是真系漆芸家）に漆芸を学ぶ。20歳頃より日本伝統工芸展をおもな発表の場として30年来入選を重ね，鑑査委員を歴任する。2008年日本工芸会保持者賞。社団法人日本工芸会理事，日本文化財漆協会理事，東京芸術大学非常勤講師，九つの音色同人，日本家具道具室内史学会会員。

一衣帯水
近くて遠い隣国・中国での将棋普及活動を終えて

六、七月のほぼ二か月間、文化交流使として中華人民共和国の上海で子どもたちを中心に日本将棋を教えました。将棋の分野からは、本間博六段がフランスに派遣されたのに続き二人目です。

当地は大変日本将棋（中国にもシャンチーという将棋があります）が盛んで、指導対局を中心に延べ一五の小・中学校、五〇近くの将棋クラブで普及活動に従事しました。指導対局とは棋力が上であるプロの私（上手）が駒を落とし、ハンデを付けて対局するものです。初心者相手の八枚落ちとなると私の駒は王将、金と歩だけになります。相当なハンデに感じられるでしょうが、なかなか下手は勝てないものです。

上海市内の小学校での実技指導

現地の学校では義務教育の中で授業科目として日本将棋があり（！）、その中で教えることも多くありました。普段はある程度の知識をもとに学校の先生が教えている（これにも驚きました）のですが、テキストが不足していることもあり、当然ながら指導者としてのレベルもそう高くはありません。子どもたちへの普及と同時に指導者の育成にも力を注ぐべきだと強く感じました。

海外における普及活動自体も私は初めてでしたので、スケジュールの消化で手一杯となり、当初頭に描いていた理想的な「文化交流使」となれたのか自信はありません。現役を既に引退し、孫もいる私には厳しい日程で、正直体がしんどいこともありました（何とかこれを消化できたのも、熱心に将棋に取り組む子どもたちの真摯な姿勢とつぶらな瞳に助けられたからでしょう）。日本将棋の特徴である「礼に始まり、礼に終わる」文化をもう少し現地に広めたかったという思いや、上海以外の土地でも教えたかったという気持ちも残っています。言葉が通じず、国民性の異なる外国で行う文化交流では事前にこちらの要望をしっかり伝えるなど準備も大切だと痛感しました。それでも需要があればまた現地へ教えにいきたいと思うのは子どもたちのひたむきな向上心に触れたからでしょう。

過去の歴史から、「近くて遠い隣国」となっている中国。私も日本人ということで嫌な思いをしたこともありましたが、互いの文化を尊重し、一歩一歩信頼関係を築いていくことが好手だと思っています。その為にも「文化交流使」制度は大変有意義であると改めて感じた次第です。

将棋棋士
有野 芳人

プロフィール

1948年生まれ。東京都出身。1965年，6級で（故）下平幸男八段門下。1971年，初段，1975年，四段，プロ棋士となる。1982年，五段，1991年引退。1994年六段。2009年5月～8月まで文化交流使として中国で将棋の普及活動を行った。

日本の伝統文化である囲碁の浸透

昨年初めてヨーロッパを訪れたとき、多くの若者が、青空の下やバーカウンター等で囲碁を楽しんでいたのに感動しました。ここで日本の伝統文化である囲碁をもっと浸透させたいという思いと、私の修業時代から歩んできた経験をふまえ、技術だけではなく精神性等も伝えていきたいという思いが日増しに強くなり、文化交流使として活動することになりました。

しかし、私はまだ渡航経験が乏しいうえ、英語が話せないので、色々と苦労もあります。オランダの空港では出迎えの人がおらず、タクシーで移動しましたが、予定と違うホテルに到着し、重い荷物を抱えながら四苦八苦しました。幸い、そのホテルの従業員の方が機転を利かせてタクシーを呼んでくれ、私の目的地を運転手に伝えてくれたので、無事に着くことが出来ました。

マンガフェスティバルでの指導風景

活動拠点のウィーンでは、オーストリア政府、GO7碁会所の方々との連携があり、私の要望にしっかり対応して頂いております。日本の囲碁には、長い歴史があり、古来より琴棋書画（きんきしょが）の一つとして重んじられ、知的で高貴な教養的要素が高かった事、礼節や道徳的なこともとても大事にしていること等を語り、特に若い人たちに日本の伝統文化である囲碁を伝えていきたい旨を話したところ、とても喜んで下さいました。

まずはマンガフェスティバル（日本のアニメを紹介するイベント）の会場で、囲碁のイベントを行い、入門講座を開いて、多くの人を対象に指導に当たりました。浴衣を着て、蛤の石を使い、足つき碁盤を写真で見せ、畳で打つ日本の伝統文化である囲碁をアピールするとともに、対局前と後の挨拶を実演し、皆にも実際に日本語で行ってもらうことで、日本の伝統文化である礼節、道徳的なことを伝えられたのではと思います。

その後、スポーツフェスティバルやグローデンバッハ小学校等でも入門者にどんどん日本の伝統文化である囲碁が浸透していくと同時に、GO7碁会所のスタッフの方々と私との友好が深まり、信頼関係が出来てきているので、とてもうれしく感じています。

今年は、日本・ドナウ交流年なので、一〇月終わりに第一回オーストリア日本大使杯がウィーン王宮内で行われました。

言葉が通じなくても、世代間、国、人種の価値観を超える囲碁のすばらしい魅力を強く感じるのと同時に、文化交流使として活動していくことで、多くの方と出会える喜びが日増しに大きくなっています。

囲碁棋士
青木 紳一

プロフィール

1965年生まれ。菊池康郎氏（緑星囲碁学園）に師事。1980年全国少年少女囲碁大会優勝。1983年(財)日本棋院に入段，1999年九段に昇段。1988年第3期俊英トーナメント戦優勝，1994年第41回NHK杯準々決勝進出。2002年通算400勝達成。日本棋院ジュニア囲碁スクール講師。2009年7月から12月（予定）まで文化交流使としてオーストリアを拠点に欧州諸国で活動。

中国福州での歌三線活動報告

文化交流使としての私の半年の旅は、大きく二つに分けられる。前半は、感謝と報恩の旅（フィリピン、中国）であり、後半は新たな開拓の旅（フランス、英国）である。その前半の主たる活動地、中国の福州での私の活動について紹介したい。福州を訪問したのは、ここが三線の故郷だからだ。この地で二か月半滞在した。

福建師範大学での歌三線講座の成果発表

福州でのおもな活動としてまずは、福建師範大学で歌三線講座を行った。二〇〇九年の九月から二か月間、毎週二回、二クラスの講座を担当した。総時間は、五八時間にもおよんだ。受講生は、音楽学部の一八人であった。開講初日、私は福州と琉球の六〇〇年にわたる友好の歴史を説き、感謝と報恩の思いで福州に来たことを話した。長い研修の結果、五曲ほどが歌えるようになった学生たちの三線に対する関心は高く、常に意欲的であった。

また、各大学の講演依頼を受け、要望に最大限に応え、八大学で講演を実施した。演題は「風土の中で生まれ育った沖縄の歌三線」である。三線を手にしての講演形式は珍しく、興味深く聞いてくれた。沖縄では昔から、幸せは西の海の彼方からやって来るとする「ニライカナイ信仰」があるが、その理想郷が福州であったのだろうと私の見解を述べた。話の間には何曲かの歌も紹介し、ときには二胡との共演で、中国でもヒットした曲「花」や「涙そうそう」を歌った。さらに、何をおいても命こそが大切であるという意味の言葉、「命（ぬち）ど宝（たから）」の説明では、第二次世界大戦における沖縄戦の灰塵の中から蘇った三線は平和を象徴する楽器であること、今回の旅は、恒久平和を願っての旅でもあると力説した。次に、沖縄の踊りの手首の返し方を教えた後、軽快な曲を弾くと、皆興に乗って手首や体を動かし、中には激しく踊りだす学生もいて、私は目頭が熱くなる思いであった。万雷の拍手の中、感謝の言葉を述べて終了となるのである。

私の福州での諸活動は、福建師範大学当局、特に劉富琳（りゅうふりん）先生の献身的なご協力のもとで成り立った。ここに、心からの感謝とお礼を申し上げたい。中国と日本、沖縄との友好の輪が今後ますます広がることを心から祈念しつつ、私はまた、新たな開拓を目指してフランスに旅立つのである。

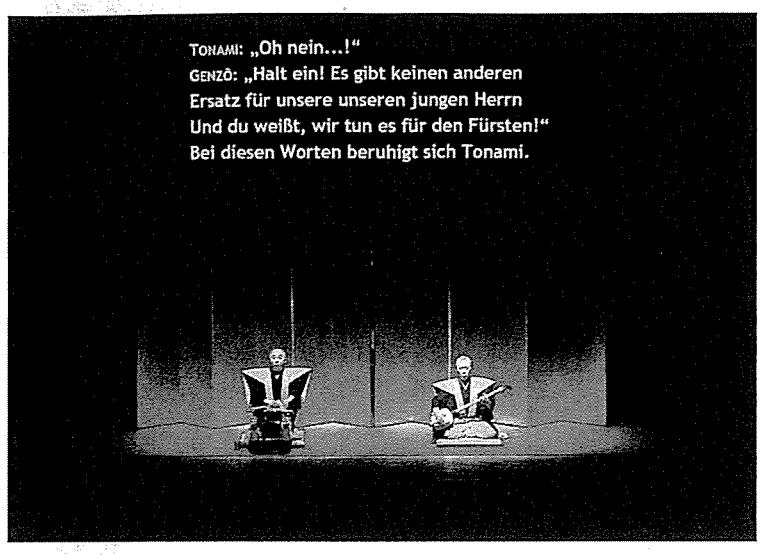
三線奏者
喜瀬 慎仁

プロフィール

1943年生まれ。沖縄県立芸術大学名誉教授，野村流古典音楽保存会師範，重要無形文化財「組踊」（総合認定）保持者，重要無形文化財「琉球舞踊」（総合認定）保持者。
2009年8月～2010年1月（予定）まで，文化交流使として，フィリピン，中国，フランス，英国で，歌三線および琉球古典音楽についてのワークショップ等を行う。

文化交流使を終えて

二〇〇九年九月の終わりから一か月間、文化交流使としてヨーロッパで素浄瑠璃公演を行いました。人形浄瑠璃文楽はユネスコ無形文化遺産にも指定されている日本を代表する古典芸能です。通常の文楽公演では義太夫節にあわせて人形を操りますが、「素浄瑠璃」とは、人形は使わず義太夫節のみをお聞かせするもので、義太夫節を語る大夫と三味線のみの演奏となります。私はこれまでにも何回かヨーロッパで素浄瑠璃公演を行ってきました。



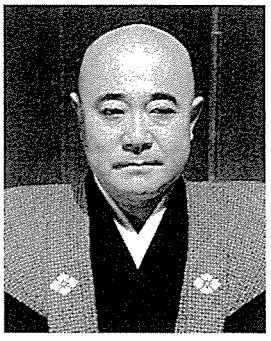
ケルン日本文化会館での実演

今回は豊澤富助さん（三味線）、豊竹靖大夫さん（大夫）、豊澤龍爾さん（三味線）の協力を得て、プラハ、ウィーン、ミュンヘン、ケルン、ハンブルグ、ダルムシュタット、シュトゥットガルトの七か所で、計一二回の公演（ワークショップを含む）を行いました。演目は、緊迫する場面や劇的な展開をもつ大曲の『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋の段」です。幼い子どもが大人の事情で犠牲となる内容なので、ヨーロッパの観客にどのように受け入れられるのか興味もあり、多少心配でもありましたが、いざプラハを皮切りに素浄瑠璃公演の幕が開いてみると、お客様からたくさんの拍手をいただき、反応はどこも好評でした。義太夫節の魅力は海外でもわかっていただけることを実感いたしました。

過酷なスケジュールの日もあり、日本に比べて寒く乾燥したヨーロッパで、体調万全とはいえない公演日もありましたが、出演者一同協力しあい、全力を尽くし、非常に充実した公演だったと思います。ベルリンではラジオ番組にも出演し、日本の義太夫節を紹介しました。各劇場では字幕を出しましたが、ドイツ語の字幕を作り、通訳等もしてくださったケルン日本文化会館・公演事業担当役のハインツ・ディター・レーゼさんや各地の大使館の方々には大変お世話になりました。

私どもの帰国後、ドイツの偉大な作曲家であるカール・オルフが「寺子屋の段」を題材にして作曲したオペラ『犠牲』がダルムシュタットで初演されるとうかがったのもうれしいことでした。

人形浄瑠璃
文楽大夫
竹本千歳大夫



プロフィール

1959年生まれ。
1978年，四代竹本越路大夫に入門。1979年，竹本千歳大夫と名乗る。1979年，朝日座で初舞台。素浄瑠璃の海外普及に関心が高く，数多くの海外公演を行っている。2009年9月から10月まで文化交流使としてチェコ，ドイツ，オーストリアで素浄瑠璃公演を開催。

日本の民族芸能を南米で発信

私は、このたび平成二一年度現地滞在者型文化交流使として、南米のブラジル、パラグアイで活動いたしました。数年前から、南米のパラグアイに拠点を置き、日本の和太鼓を含む民族芸能を南米の方々に伝える活動を行っております。しかしながら、南米の国々はとても広大で、私が拠点としているパラグアイでも、国土は日本の一・一倍、ブラジルにおいては日本の二二倍以上の広さがあります。このため、普段の活動では、残念ながらごく限られた地域にしか、文化を伝えることが難しい現状があります。

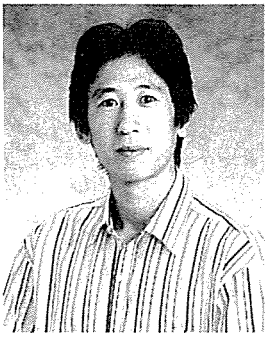
このたび文化交流使として活動することができたことで、パラグアイから四〇〇〇km離れたアマゾンのパラ州・ベレン市で行われた「アマゾン日系移民八〇周年記念祭」に、私がパラグアイで指導している日系青年のグループとともに参加することができました。記念祭では、一万五〇〇〇人以上の現地の方々に、日本の文化である唄や踊り、笛や和太鼓の響きを伝えることができました。また一方でブラジル南西部のサンタカタリーナ州におきましては、公演活動以外に、多くの現地の方々に、実際に和太鼓に触れる機会を作ることができました。日系人、ブラジル人の方、また年齢も一〇歳に満たない子どもから五〇代の方までと、多くの方々が和太鼓を叩き、心地よい汗を流しておりました。

アマゾン日系移民80周年記念公演

一口に和太鼓と言ってもたくさんの叩き方があります。私がおもに伝えている和太鼓は、民族芸能と呼ばれているジャンルの和太鼓で、日本各地のお祭りなどで受け継がれてきている民衆の生活の中から生まれたものです。最近日本の文化は、漫画やアニメ、食文化はもちろんのこと、民族芸能においても南米のみならず世界的に注目されています。今回和太鼓のワークショップに参加された方々も、とても日本文化に興味をもっており、和太鼓のリズムや、叩き方だけではなく、民族芸能としての和太鼓のもつ背景にも、とても興味を示していました。

今回、私が文化交流使として紹介することのできた日本の民族芸能としての和太鼓が、今後さらにブラジルやパラグアイで、多くの人々に親しまれながら受け継がれていくように、微力ではありますが、これからもこの活動を継続していけたらと考えております。

和太鼓奏者
澤崎（さわさき） 琢磨（たくま）

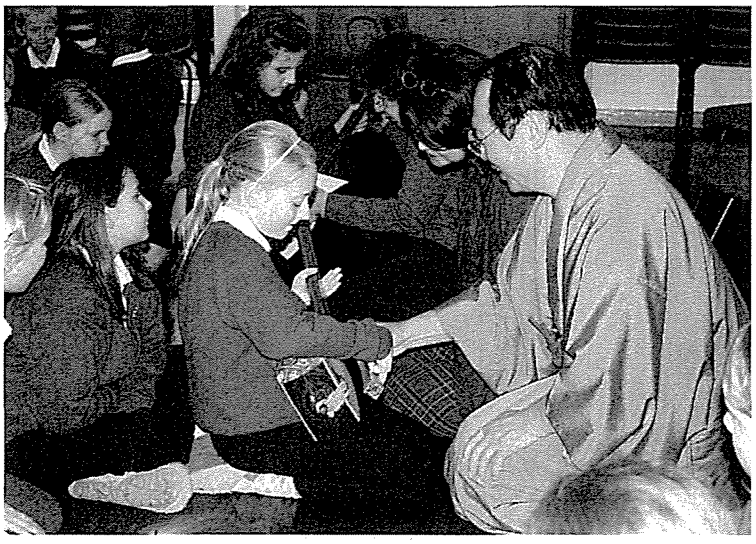


プロフィール

1973年生まれ。10歳から，パーカッション，和太鼓，篠笛，日本の民族芸能を学び，和太鼓を中心とした民族芸能の公演活動を行う。2002年からパラグアイ・イグアス移住地に移り住み，イグアス太鼓工房の代表として，太鼓作りに携わりながら，現地の人々を対象に太鼓や篠笛の指導にあたる。2009年8月から10月まで文化交流使として，パラグアイ，ブラジルで活動。

苦あれば楽あり新内の伝道

邦楽は難しい、長くて分かりにくいとかつまらない等と敬遠され、邦楽人口も愛好者も減少の一途をたどっている。そのうえ我が新内節は他流とのタイアップが少ないので特にその傾向は顕著である。そのため、*新内の伝承の危機を憂慮しその宣伝普及活動を展開して三十数年。国内はもとより積極的に海外へも出かけ五十数都市を廻っている。そんな折、海外への派遣事業である文化庁文化交流使を聞くにおよびその事業に参画したいと願っていたが、昨年ありがたいことに交流使に指名される幸運を得て、海外派遣型の交流使として四五日間イギリスとアイルランドとベルギー、そしてオランダの四か国へ出向いた。現地では、新内を語り教え講義をして日本の浄瑠璃の心の一端を伝え、三味線音楽の紹介をして来た。


学校でのワークショップ

小学校八校、大学五校そして養護学校などトータルで二〇か所を訪問し、新内の演奏、レクチャー、ワークショップを行った。小学校では三味線のデモンストレーションとワークショップを行った。人数が多いので三味線を弾くというより触ってもらう程度となった。一人一分位であったが、興味津々で楽しそうに撥(ばち)を握って糸に当てていた。私が語ると目を丸くして真剣に聞いていた。外国の子どもたちはいずれも物怖じせず恥ずかしがらず積極的に取り組む姿勢が好ましい。大学では新内演奏を主体にした。静かに熱心に聞く生徒や教師の態度にこちらも真剣であった。特に印象的であったのがアイルランドのコーク大学での演奏であった。演奏会場が構内の教会で、静謐(せいひつ)な雰囲気の中で古典をじっくり聞いてくれ、字幕や解説の効果もあり深く感動してくれた。またスコットランド大学での演奏では、当地の偉大なる詩人「トーマス・バーンズ」の詩を言語でしかも即興で語った。これは大いに喜ばれ強い交流を成し得、その上、新内の啓発に役立った。

欲を言えばもう少し長く滞在して活動をしたかった。イギリスとアイルランドをレンタカーで走り回って苦労したが楽しい想い出と有意義なる体験となった。

＊新内（新内節）：三味線を伴奏とする浄瑠璃（語り物音楽）の一つ

プロフィール

鶴賀流十一代目家元。幼少の頃より，新内節の太夫（語り手）であった父の鶴賀伊勢太夫より新内節浄瑠璃の手ほどきを受け，新内の道に入り，伝統的な新内節の技法を的確に体得。欧米・南米など多くの国で新内の海外普及にも取り組んでいる。新内協会理事長。2009年9月から10月まで文化交流使として英国，アイルランド，オランダ，ベルギーで活動。

重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者
鶴賀 若狭掾（つるが わかさのじょう）

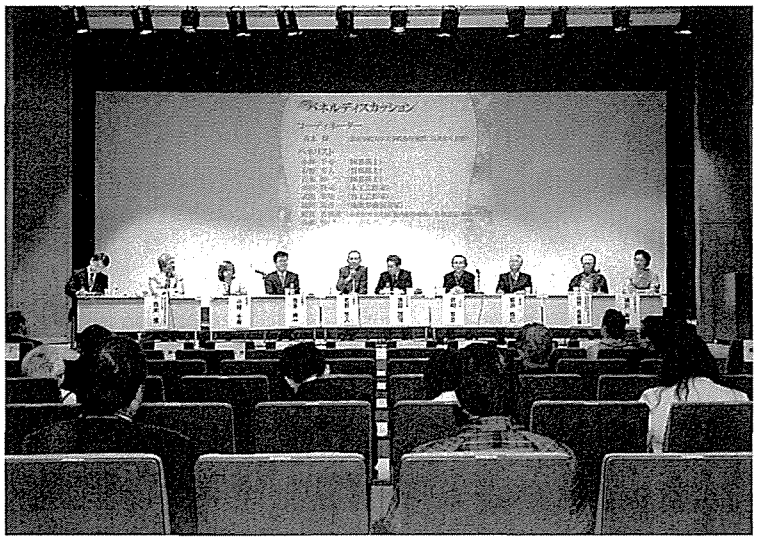
「第七回文化庁文化交流使活動報告会」開催

三月九日、東京国立博物館平成館大講堂において、「第七回文化庁文化交流使活動報告会」が開催されました。

「文化庁文化交流使事業」は、芸術家、文化人等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、日本と外国の文化人とのネットワークづくりにつながる活動を展開することを目的とした事業です。

喜瀬慎仁氏（三線奏者）の実演

今回の活動報告会では、玉井日出夫文化庁長官からの挨拶に続いて、コーディネーターとして、前文化庁長官・青山学院大学大学院特任教授の青木保氏を迎え、海外での活動を終えた文化交流使による報告が行われました。


パネルディスカッション

報告を行ったのは、小林千寿氏（囲碁棋士）、有野芳人氏（将棋棋士）、青木紳一氏（囲碁棋士）、須田賢司氏（木工芸作家）、武関翠篁氏（竹工芸作家）、福田栄香氏（地歌箏曲演奏家）、鶴賀若狭掾氏（重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者）、喜瀬慎仁氏（三線奏者）（報告順）の八名。各々が実際の活動時の写真や映像などを用いて、日本文化の発信や外国の文化人等とのネットワーク形成について、苦労談や現地の反応なども交えて報告しました。

続いて、青木保氏のコーディネートによるパネルディスカッションが行われ、出演者全員が、自らの体験に基づいて、活動時に心がけたことや、工夫した点等を述べました。

文化交流使関係者や一般来場者約一〇〇名が、文化交流使の報告を熱心に聞き入っていました。

竹工芸をとおしての文化交流

マイスターの国ドイツにて

私はドイツにおいて、文化庁「文化交流使」として、北から南まで5都市、37日間滞在し、25回におよぶ竹工芸制作の実演・実技指導・講演・講義等を行ってきました。

この企画は、ハンブルク工芸美術館において、竹工芸作家の初代早川尚古斎（しょうこさい）の作品を中心とする―日本の竹工芸展「籠師」―の開催に際し、竹工芸制作の実演を依頼されたことに始まります。ドイツでは、柳、籐の籠製品などの編み組技術は発達していますが、竹の自生がないため、竹工芸技術はありません。そこで、この機会に日本の伝統工芸である竹工芸の制作技術を理解してもらおうと思い、ハンブルク工芸美術館をとおしてドイツ国内の美術館や学校等に実演の希望を募りました。

ハンブルグ工芸美術館での実演

リヒテンフェルス国立編み組デザイン専門学校でのワークショップ

実演は、日本から持ち込んだ丸竹を割ってヒゴを作ることから始め、簡単な籠を完成させる間に竹の性質、特徴、いろいろな編み方等の説明を加えて竹工芸の理解を深めてもらうようにしました。各会場の参加者は50～70名程度でした。多くは工芸に興味のある一般の方たちでしたが、中には学生や研究者の方もいました。

ドイツの籠は、柳、籐を材料にした編み製品でありますが、技術的にはかなり高度です。柳は皮を剥くと白く、やわらかい素材でゴザ目系で編むことが多く、私が指導をした編み組デザイン専門学校の学生は最近では伝統的な籠より家具・インテリア関係に進む人が多いそうです。でも学生の中には指導後に「日本で竹工芸の勉強がしたい」と言ってきた人もいました。

実演・講演等に参加した人は、のべ850人程度でしたが、私が竹を割ると柳と違いバリッと大きな音をたてるので大変驚いていました。編む過程を見てその技術の精緻さや、参考に持っていった作品を手に取り、触れてもらい魅力を感じてもらいました。また、10社におよぶ新聞がこの企画を大きく取り上げ報道してくれました。この他複数のオンライン情報誌の配信やポスター、DM等の広報活動があり、この企画が広く周知され関心を呼んだと思います。今回希望に添えなかった美術館もありました。ワークショップを見たという大学の学長から、次の来独には自分の大学に来てほしいというメールが届いたりもしました。

私が好きな「極める」という言葉と同じ意味の言葉がドイツにもあるそうです。伝統を重んじる「マイスターの国」ドイツは日本と多くの共通点があると、今回肌で感じることができました。多くの成果を得られたことは、文化庁をはじめ日本工芸会、ドイツでお世話してくださった方々のおかげと深く感謝いたします。

竹工芸作家
武関（ぶせき）　翠篁（すいこう）

プロフィール

1958年生まれ。竹工芸作家の家に生まれ，2代目父翠月に師事，若くして日本伝統工芸展に連続入選し日本工芸会会員となる。日本伝統工芸展NHK会長賞をはじめ数々の賞を受賞し，同展の特侍者となる。一方同展および支部展等の鑑審査委員を務め，日本伝統工芸界の指導者的立場で活躍している。2009年10月から11月まで文化交流使としてドイツで活動。

Washi Tales と Paper Tales

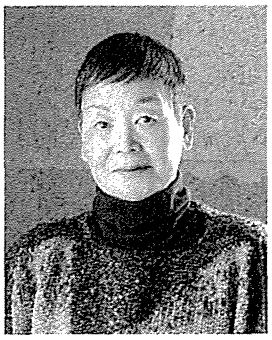
文化庁から文化交流使の打診をいただいた時期に、私はアメリカの演劇関係者と新しい舞台芸術を立ち上げるところでした。和紙の歴史にテーマを求め、精神の依り代としての和紙の文化を舞台化して、ペーパーレスの情報伝達が加速する現代に一石を投じようとするものです。タイトルは〝Recycling-Washi Tales〟と決まり、伝統と現代、アメリカと日本、舞台芸術と造形美術等、幾重にもある現存のバリアーを超えてハイブリッドの成果を目指すものでした。私の文化交流使としての活動はこの活動を始動させることと、これまでに受け皿として私に仕事の機会を与えてくださったいくつかの大学に、お礼も兼ねて貢献させてもらうことでした。まず私が連携教授をつとめるシカゴ近郊のイリノイ大学に立ち寄り、美術館で保管していただいている作品を移動させるため2組の人と車を手配し、東のニューヨークには学生が向かい、私は西のカリフォルニアルートに同行しました。アリゾナで展覧会を立ち上げてからUCLAの日本学研究所で、作品紹介のプレゼンテーションを行い、またNYではニューヨーク・シアターワークショップで10日間、日本から4人が参加して日米混成のワークショップを行いました。言葉の違いを超えて、心に響くものを目指した試みは前向きに受け入れられたようで、2011年の完成に向けて幸先のよいスタートとなりました。

NAFEZA Foundation ワークショップ

NY Theater Workshop での舞台美術

アメリカでの仕事を年末に切り上げて、宿願であったエジプトに年初から出かけました。和紙のノウハウを伝授するためにすべての資機材を仕立てて十全の準備をし、2人の紙匠に同行願いました。現在のエジプトでは紙の起源であるパピルスをはじめ、古代文明発祥の地でありながら紙漉きの手技は忘れ去られ、芸術文化の素材として尊ばれることはありません。その中で先駆的に手漉き紙に取り組む芸術家の活動を支援するため、展覧会とワークショップを実施しました。作品の輸出入、展示、現地機関との折衝やスケジュール調整、生活面でもさまざまな困難に直面し、そのたびに国際交流基金カイロ事務所と大使館のヘルプで切り抜けることができました。社会的規範の違う国での文化紹介と貢献には日本の出先機関のバックアップが必須であることを痛感しました。多くの報道にも助けられて砂漠と太陽の国での活動は話題となりましたが、異文化である和紙が受容されるには、持続的活動が不可欠でしょう。現地の招聘者がつけた展覧会のタイトルは〝Paper Tales〟でした。これを機会にパピルスと和紙とのハイブリットで新しい紙物語がうまれ、エジプトバージョンのWashi Talesが育つことを願ってやみません。

和紙造形家
伊部　京子



プロフィール

1941年生まれ。日本の伝統素材の和紙に新しい造形手法を導入し，アート，クラフト，デザインの境界を越えた創作活動を続け，独自の領域を開拓している。和紙文化の国際的な普及活動にも積極的に取り組んでいる。京都工芸繊維大学特任教授，イリノイ大学連携教授。2009年11月から2010年3月まで文化交流使として米国，エジプトで和紙の制作実演やワークショップを行った。

再訪を心に誓う

ニューヨークに3か月間滞在し、切り絵をとおして日本文化を伝える文化交流使の活動を行ってきました。

オリジナリティーを発揮するニューヨーク。驚くほどの多人種文化がもつ混沌としたエネルギーがひしめき合っている町。

マンハッタンを拠点にウエストバージニア州やテネシー州、ペンシルバニア州、ニュージャージ州などに訪れて、ワークショップやレクチャーを行いました。子どもから大人までが参加し、学校や図書館、美術館などで切り絵という日本独自のアートの世界を紹介しました。

ニューヨークマンハッタンのKinokuniya Book Storeにてワークショップを開催

フィラデルフィアにある，ブリンマーカレッジにてレクチャーとワークショップを開催

デッサンから作品に仕上げるまですべて手作業の切り絵。作品に仕上げていく過程の話に日本文化を織りまぜながらレクチャーを行いました。

ワークショップでは、絵柄は富士山などの日本らしい図案を作品に仕上げてもらいました。「人が手間ひまかけて丹念に作ったものには、大量生産にはない味がある」「つくる喜びを感じた」「日本の文化に触れることができた」といった声が多く寄せられ、また同じ様な内容の手紙が多く届いたのには感動しました。

どこに行っても驚いたことは、とても器用にアートナイフを使う姿でした。それは、未知の物に対する興味から価値観に変わり一生懸命になることから生まれる集中力でした。とくにアート系の高校や美術大学の学生たちが切り絵に強い興味をもってくれ、私にとっても大きな手応えを感じることができました。

ニューヨークの大都市を遠く離れて訪れたのは、二つの州（ウエストバージニア州・テネシー州）でした。ニューヨークとは違う文化や歴史を感じることができ、私自身も吸収することが多い時間でした。文化交流活動を行うことの重要さを、現地の方々との交流を通じて再認識することができました。

再訪を誓っていたところ、今回の活動を知った、フィラデルフィアにある大学から秋に招聘を受ける事になりました。また新たな文化活動が出来そうで今から楽しみであります。今後も切り絵作品を通じて日本国内外で日本の文化を紹介して行きたいと考えています。

切り絵画家
久保（くぼ）　修（しゅう）

プロフィール

1951年山口県生まれ。
1971年切り絵の制作を始める。スペイン遊学などを経て独自の世界を切り開く。1999年ふるさと切手「隅田川花火・朝顔」・2005，06年年賀葉書・2009年ふるさと切手「深川八幡祭」のデザインを担当。2008年ニューヨークで展覧会開催。2009年度文化庁文化交流使としてニューヨークにて活動。
著書に『紙のジャポニスム・切り絵ー日本の四季ー』（土屋書店）民謡えほんなどがある。久保修オフィシャルサイト
http://www.shu-kubo.com

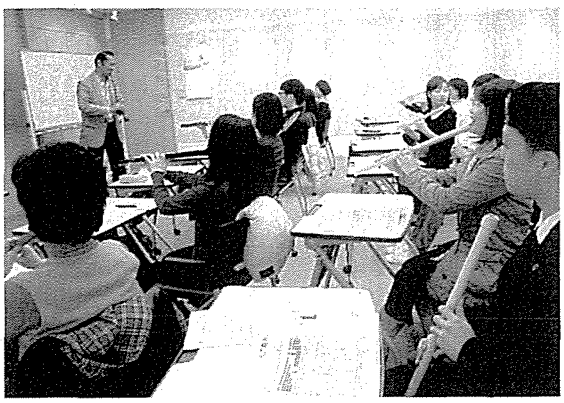
種を蒔くにも土壌の改良

この地球上、過去から現在に至るまで国家あるいは民族同士の戦乱が絶えることはなく、地上の国境線はまるでそれぞれが生き物のごとく離合集散を繰り返して来ました。通常、文化という存在はその時代の体制に属する副産物のように考えられてしまうケースが多いようなのですが、実は文化もまた別の種の生き物のごとく国家・体制、さらには民族をも超えてしたたかに生き続ける特別な存在なのではないでしょうか？

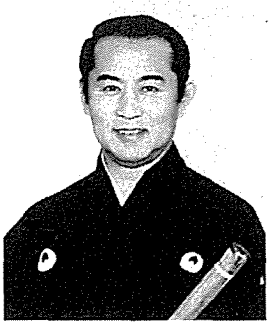
具体的な話になりますが、近代のアジアの国々の中で、台湾と韓国の尺八事情にその顕著な状況を見ることが出来ます。前者には年輩の方々を中心に当時の歌謡曲や軍歌、そして現在の台湾の歌曲等などを吹いて楽しんでいる独特な尺八の世界が存在しています。一方韓国では戦後、日本文化の解放を制限していたために現在に至るまで現地で尺八の教授を出来る方はお一人もいないということです。しかし今、ソウル市内ではちょっとした日本ブームが起こっています。これは我が国での韓流ブームに対する逆現象であると言う方がいらっしゃいますが、いずれにしましても特に過去の出来事を客観的に直視出来る若い世代の人々が日本文化に対して非常に強い興味をもっておられるようです。実際には尺八のワークショップを行うと一般の若い方々が常に10名前後は必ず参加されます。また本事業の実施を行いましたもう一つの国ブラジルでは一説には150万人に近い日系人の方がおられるにもかかわらず、組織的な問題もあり日本の文化活動が盛んに繰り広げられていない状況です。

これからは実演家や専門家を単体で派遣するのみならず、現地での受け入れ体制に良い意味で国が力を貸しながら波状的に梃入れをしていくことが重要になるのではないかと思います。良くも悪くも歴史の流れの中で過去に蒔いた日本文化の種を再び育てまた新たに蒔く為には、やはり土壌の改良を試みなければならないでしょう。

ブラジルでの郊外研修所で開かれた曹洞宗の禅の接心会に参加


韓国での国際交流基金におけるワークショップ

尺八演奏家
三橋（みつはし） 貴風（きふう）



プロフィール

古典尺八を佐々木操風および岡本竹外に師事。第1回リサイタルにより文化庁芸術祭優秀賞（1980）を受賞。その後大阪文化祭賞（1981），文化庁芸術祭賞（1989），中島健蔵音楽賞（1992），文化庁芸術作品賞（同年）を，また「三橋貴風　尺八本曲　空間曼陀羅」により文化庁芸術祭大賞（2009）を，文化庁芸術選奨（2010）を受賞。NYカーネギーホール等において指揮の小澤征爾（せいじ）氏と共演。

平成22年度文化庁文化交流使指名書交付式

7月20日、東海大学校友会館において「平成22年度文化庁文化交流使指名書交付式」が開催され、玉井文化庁長官（当時）から、今年度海外派遣型文化交流使として活動していただく方々に指名書を交付しました。

「文化庁文化交流使事業」は、芸術家、文化人等、文化に携わる人々を「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、日本と外国の文化人とのネットワークづくりにつながる活動を展開することを目的とした事業です。

今回の指名は、すでに今年4月から来年3月にかけてフランス及び周辺国で活動するため派遣中の黛まどか氏（俳人）に続く指名となります。今年度の海外派遣型文化交流使（11名）の方々と派遣国は次のとおりです。

海外派遣型（氏名・プロフィール・活動予定国）

○いわみせいじ・漫画家・シンガポール、マレーシア、韓国、英国
○佐々木康人・華道家・ベトナム、シンガポール、タイ
○澤田勝成・津軽三味線奏者・中国
○笑福亭銀瓶・落語家・韓国
○津村禮次郎・能楽師・ロシア、ハンガリー
○野田哲也・版画家・イスラエル、英国
○藤間万惠・日本舞踊家・中国
○黛まどか・俳人・フランスおよび周辺国
○蓑輪敏泰・和太鼓奏者・メキシコ
○山内健司・俳優・フランス、スイス、ベルギー
○山村浩二・アニメーション作家・カナダ

指名書交付式で、玉井文化庁長官（当時）は、「日本文化・芸術への理解の促進と相互交流の推進のため、ご活躍いただくことを期待しております」と挨拶しました。

加えて、短期指名型文化交流使（4団体）の指名もそれぞれ次のとおり決定しました。

短期指名型（団体名・分野・活動予定国）

※国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行います。

○有限会社アトリエ・アサクラ・日本舞踊・韓国
○一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会・沖縄歌舞・メキシコ
○財団法人日本余暇文化振興会・津軽三味線・メキシコ
○金春流能ドイツ巡回公演実行委員会・能・ドイツ

文化交流使と文化庁幹部

ハイカイの旅を辿って

4月よりパリを拠点に活動をしています。

フランスにハイカイ（俳句）がもたらされたのは今から約100年前のことです。以来フランスにおける俳句はさまざまな時期を経て、現在はブームと呼べる状況にあります。最近フランスでは俳句を詠む人のことをハイキストと呼ぶそうで、約5000人のハイキストが俳句に親しんでいます。

精神科医で詩人、哲学者でもあったポール・ルイ・クーシュが、初めて日本を訪れたのは1903年のことでした。8か月程の滞在の間に俳諧に出会ったクーシュは深く感動し、フランスにハイカイを紹介しました。帰国して彼がまっさきに行ったのは、2人の友人を誘って、セーヌ河を遡行（そこう）する船による吟行（ぎんこう）でした。旅中に詠まれたハイカイは1905年7月に、『Au fil de l'eau』（水の流れのままに）として自家出版されました。彼らは連句のような形式で72句の連作を試みています。彼らの道程は、ノートル・ダム寺院の近くのパリの港を発ち、セーヌ河を上り、その後ロワン運河、ブリアール運河、ロワール並行運河をラ・シャリテまで行くというものです。

クーシュの足跡を辿る旅を再現し、日仏の俳人たちと俳句を詠むことができたら、文化交流使として一つの役割を果たせるのではないか。私が旅を企画すると、日仏から数名の俳人・ハイキストが集まりました。

7月末、船はバスティーユの港を出航しました。ノートル・ダムに別れを告げ、クーシュたちと同じルートでセーヌ河を遡行しはじめます。船の中ではフランス人のハイキスト、マルティン・ブリュイエールさんが発句を詠み、連句は始まりました。

bercees par la brise des amies sur le bateau les ponts de paris.

その後も月の座・花の座など要所をハイキストたちに詠んでもらい、8日間の船旅の間に日仏合作の歌仙が巻きあがりました。紙数の関係で詳細は記せませんが、ともかくも水の歌枕を訪う旅は無事終わりました。クーシュたちがセーヌに残したハイカイだけを頼りに辿った旅でした。

「東西の未来に、我々の芸術はそれぞれ、再会した兄弟の芸術によって生き続けるであろう……。神秘的な照応が、一つまた一つ発見されるであろう」。クーシュの言葉です。これからも日仏の俳句を愛する者の間に、そして東西の未来に、クーシュたちの志とハイカイの旅は続いていくことでしょう。

参考文献：（ポール・L・クーシュー、金子美都子・柴田依子訳『明治日本の詩と戦争―アジアの賢人と詩人』（序章）みすず書房、1999）

俳人
黛（まゆずみ） まどか

プロフィール

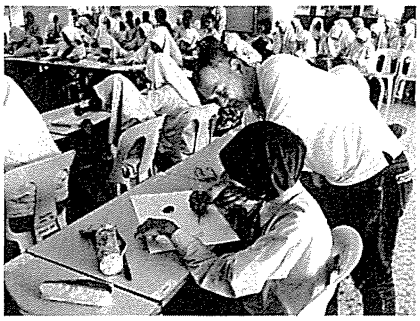
神奈川県生まれ。1994年，「B面の夏」50句で第40回角川俳句賞奨励賞受賞。2002年，『京都の恋』で第2回山本健吉文学賞受賞。「日本再発見塾」呼びかけ人代表，「社団法人日本ユネスコ協会連盟」未来遺産委員等も務める。近刊に，茂木健一郎氏との共著『言葉で世界を変えよう』（東京書籍）他著書多数。携帯メールマガジン『言葉（ことのは）サロン』を無料配信中。
登録アドレス http://madoka575.co.jp/mm/
黛まどか公式ホームページ http://madoka575.co.jp

受講生から学ぶ「漫画の魅力」

文化交流使として日本を旅立ってから早や2か月半が経過いたしました。その間、三つの国で文化交流活動を行いました。その活動の様子をお伝えいたします。

マレーシア……先ず、8月初旬。私の文化交流使としての活動はマレーシアから始まりました。

クアラスランゴールとマラッカ、各市の中等学校で「似顔絵レクチャーと私の漫画パフォーマンス」を行いました。各校とも休憩を挟まずの120分という、授業としてはかなり長時間のものとなりましたが、学生の皆さんならびに先生方も熱心に取り組んでくださり楽しい交流となりました。


マラッカ中学校でのワークショップ（マレーシア）

クアラスランゴール科学中学校での活動の様子（マレーシア）

シンガポール……8月中旬からはシンガポールで活動をいたしました。

JCC（ジャパン・クリエイティブ・センター）での漫画ワークショップでは、受講生のみなさんに3日間通っていただき、オリジナルの漫画原稿を1ページ作成してもらうことにいたしました。かなり厳しい課題かな……とも思いましたが、参加受講生13名全員が見事完成にいたりました。

受講生の皆さんが私に「指導する喜び」を感じさせてくださいました。

韓国……9月に入ってからは韓国での活動となりました。過去に何度も訪れていた国ではありましたが、今回初めての体験をしました。

国立大学〔韓国芸術総合大学〕の漫画専攻科で特別講義をもつこと。通訳を介さずに講義をすること。どちらも初めての体験でしたが、漫画の力にずいぶんと助けられました。

10年前から漫画交流のため、独学で勉強し始めた韓国語。まだまだ拙いのですが、講義をする側、受ける側、双方とも漫画を愛するもの同士。140分の講義中、言葉の足りない部分は絵〔漫画〕で表現し説明をしました。

プロの表現者を目指す彼らの眼の輝きが印象的でした。

各国で違った形での活動を行ったものの、いずれの国でも「漫画を描く喜び」「漫画を教える喜び」「漫画を介して心を通わせる喜び」を実感させてくれました。

今後もこの経験を活かし文化交流使として活動してまいります。

漫画家
いわみせいじ

プロフィール

1960年，和歌山県生まれ。1981年，4コマ漫画誌『まんがタイム』（芳文社）の新人漫画賞を受賞。『おーい！ダンくん』連載を開始。漫画家としてデビュー。
以降，4コマ漫画を中心に新聞，雑誌に多数連載。2000年，韓国・済州島で開かれたJAPAN WEEKで2週間の期間に2000名の似顔絵を一人で描きあげる。
社団法人日本漫画家協会会員
マンガジャパン会員

メキシコ滞在あれこれ

文化交流使として初めてメキシコに滞在した中で、失敗、成功、なぜ？　え～!?　など、思い出せるいくつかを記してみます。

〈高地〉

1日目、町を歩き始めてまもなく、息苦しさを覚え、「10分も太鼓を打ったらどうなるんだ!?　こりゃ大変だ！」で、トレーニングジムで毎日マシンに向かうことにしました。

〈太鼓を打って〉その1

日本メキシコ学院で28時間、2週間掛けて指導しました。メキシココースの4年生に和太鼓で使用する楽器の説明中、篠笛（しのぶえ）を用いて、〝村祭り〟を助手の山本が吹いたところ、なんと歌いだしました。「えっ！　えっ！　打ち合わせもしていないのにどうして知ってるの!?　日本コースならともかく。」（昨年発表会で歌ったんだとか！）こんな偶然も……。

〈太鼓を打って〉その2

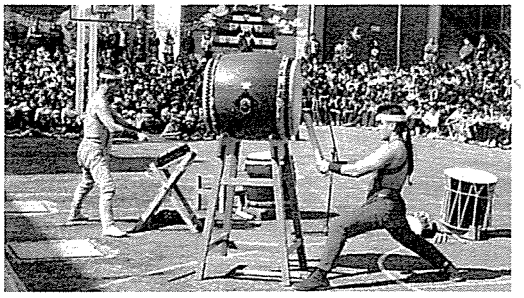
「私の靴と交換できないか？」メキシコ人男性に尋ねられたことがありました。白足袋で演奏後のことでした。「弱ったなあ……。あなたがわたしに代わって太鼓を打ってくれるなら足袋と交換しよう！」彼は両手を広げて笑いながら「それじゃ、写真をいっしょに！」ということで一件落着。

〈魔よけをアミーゴに！〉

ダンサ・アステカの音楽と踊りを楽しんだ後、ダンサーを訪ねて、いっしょにアステカの太鼓を打ちました。（バチは木の枝で手作りの粗末なもの）「彼は日本の太鼓の先生です。」と助手の山本が紹介すると、「オー　アミーゴ、アミーゴ」と後をついて来て、別れ際に「アステカの魔よけだ。おまえにプレゼントする。」と足につけていた鳥の羽を一本くれました。「私は何もお返しするものがないよ。」「何もいらない。コラソン（心、気持ち）だけでいい。」と、名刺を交換し、再会を約束して別れました。最高のメキシコみやげに。

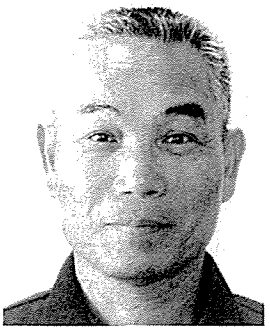
〈感謝〉

メキシコ人の人なつっこさ。目が合うと微笑みを返す女性。背も日本人並み。顔立ちも我々に近い。それに、お世話いただいた大使館のみなさん、日墨協会の事務局長さん、日墨学院の先生たち。ブラジルへ向かう飛行機の中で、35日間を思い返しながら感謝と「また必ず来るよ！」の気持ちをふくらませつつ眠りに就きました。


日本メキシコ学院での演奏

日本メキシコ学院の生徒たちとのワークショップ

和太鼓奏者
蓑輪（みのわ）　敏泰（としやす）



プロフィール

昭和23年5月19日生まれ。宮崎県串間市出身。太鼓歴25年。串間くるみ太鼓・ジュニアチームを4回全国大会へ導く。
（財）日本太鼓連盟1級公認指導員。
2007年～09年　JICAシニアボランティアとしてブラジルの太鼓指導にあたり，08年「ブラジル日本移民100周年記念」での1,000人太鼓を大成功に導く。現在もブラジルにて指導。
このたび，文化交流使として35日間，日系三世ブラジル人で3か国語を話し，太鼓が打てる山本雄二を伴ってメキシコに滞在。

韓国での嬉しい出会い

2005年からスタートさせた私の韓国語落語。毎年、韓国での公演を続けているうちに、なんと、2010年度の文化交流使に選ばれ、10月の1か月間、釜山、ソウル、済州を拠点に全20公演をさせていただきました。始めた当初はまったく想像もできなかったことで、誠に光栄で幸せなことだと思っています。

これまで同様、日本語科のある大学校を中心に公演を行いました。いつも苦労するのが、落語の舞台、高座の設営です。学校にあるテーブルなどを使い、上から赤い毛氈（もうせん）を掛け、手作りの高座作り。聴衆の全員が、座布団を含めた私の姿を見ることができなければ、落語の世界に入れません。必要な高さは120㎝。面積も畳2枚分くらいなければ十分な動きが取れません。実際にやってみせると、韓国人は「なるほど」と理解してくれます。今回は大使館や総領事館のおかげで、多くの会場で楽に高座が作れました。これには大変感謝しています。

今回、印象に残っている公演先を挙げるなら、釜山日本人学校と慶州ナザレ園です。釜山日本人学校では、小学生から中学生まで、少ない人数ですが家族的な雰囲気で頑張っている子どもたちを見ました。異国の地で生活しているが故、日本人なのに馴染みの薄い日本の文化「落語」で大いに楽しんでもらえて、私も嬉しかったです。そして、慶州ナザレ園に住んでいる20数名の日本人のおばあちゃんたちと話した時、「韓国語落語を始めて良かった」と思えました。韓国語落語をしていなかったら、おばあちゃんたちとも出会えていません。しかし、彼女たちが「韓国語落語」を聴いて笑っているのを見て、嬉しいのだが、少し複雑な気持ちにもなりました。戦争や歴史に翻弄され、故郷・日本と決別せざるを得なかった彼女たちと接し、2年前に他界した祖母のことを想いました。韓国に住み続けていても、おばあちゃんたちの心の中には「日本」があります。今度は日本語の落語を聴かせてあげたい。

文化交流使として韓国に1か月滞在し、「落語家になって本当に幸せだな」と改めて思えました。落語のおかげで自分が少しでも人の役に立てる。

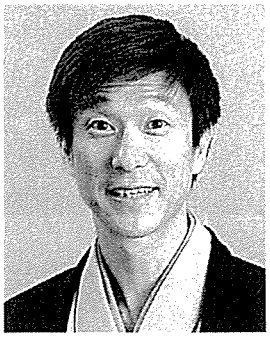
今回の経験を生かして、さらに前進していきたい。

釜山日本人学校での韓国語落語講演

東義大学にて韓国語落語公演の様子（釜山）

落語家

笑福亭 銀瓶（しょうふくてい ぎんぺい）



プロフィール

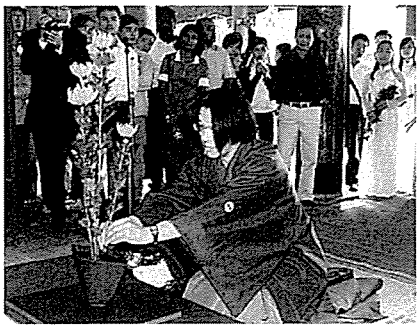
昭和63年，笑福亭鶴瓶に入門。
大阪を中心にテレビ・ラジオ・落語と精力的に活動を行う。
2004年の秋に映画「血と骨」をきっかけに，自らの中に韓国の血が流れていることを再認識し独学で韓国語の勉強を始める。
習い始めて3か月で韓国語落語にチャレンジし，2005年2月22日に大阪朝鮮高級学校で，初めて韓国語落語を行う。それから毎年，韓国各地で韓国語落語公演を実施している。

日本の心を花で伝えて

このたび、文化交流使として昨年9月9日より11月14日まで、ベトナム・タイ・シンガポール・マレーシアでいけばなの紹介・普及活動を行い帰国いたしました。

おもな活動としてデモンストレーションと講習会を設定いたしましたが、ただ見ているだけではなく参加型の行事を心がけ、デモ終了後に体験講習会を催すなど、現地受け入れ先の要望を取り入れながら、行事がより地元の方たちに身近なものになるよう配慮しました。全日程70日間で、デモンストレーション23回・講習会29回・花展3回・献華1回を行いました。文化交流使としての活動をより広く現地の方々に知っていただけるようにと、バンコクではデパートの1階、また、クアラルンプールでは巨大ショッピングモールの入り口ホールでデモンストレーションをする等、活動の魅力化を図ると同時に、日本のいけばなを支えてきた「花の命に対する日本人の心」といった精神にも必ず言及し、単に見た目のきれいさではなくて、目に見えない大切なものを伝えるように努力しました。

婦人文化会館参加者への指導の様子


ハノイ文廟にて献花

今回の活動の主体となったベトナムでは、在ハノイ日本大使館様・在ホーチミン総領事館様・国際交流基金様のご協力のもと、万全な体制で仕事をさせていただきました。ハノイ・ホーチミンともに若い方たちの参加が多く、日本語を習っている方も多いとのことで大きな可能性を感じました。講習会の会場となった文化センター事務局に、参加者からいけばな講習会の継続が求められるなど、今後が楽しみな反応がみられました。

今回、東南アジア各国を訪問し、発展のまっ最中にある〝熱気〟を感じると同時に、彼らの中にある日本への大きな興味を実感しました。若い世代は、マンガをとおして日本に対する知識を得ることも多いそうで、J・pop などの音楽の情報も彼らはリアルタイムで手にしていました。そのような状況の中で日本文化を伝える大切さと、伝統的生活文化である「いけばな」に携わる一人として、時代に合わせたその方法論の必要性を痛感しました。

最後に、今回の活動をご支援いただきました、関係各機関・各位に心から御礼を申し上げます。今回の文化交流使の活動が単なるイベントに終わることなく、現地での継続的ないけばな活動につながる様、今後も心がけたいと思います。

華道家
佐々木 康人（ささき やすひと）

プロフィール

1959年生まれ。1994年いけばな教授者となり現在に至る。2003年池坊全米いけばな特派講師に任命され渡米。帰国後，国内外を問わず会員の指導を行っている。国際交流基金などからの要請で，ミャンマー，ベトナム，カナダ，UAEにてデモンストレーション・講習会を実施。2008年には，G8北海道洞爺湖サミット会場に作品展示。2010年9月から11月まで，文化交流使としてベトナム，タイ，シンガポール，マレーシアで活動。